

富田大尉の二隊は、第一第二の門を通過して、城壁内なる市街に突入致しましたが其の市街の入口は、殆んど廣小路とも云ふべき大道路であつて、それで這入つて右手の壁上へ登る坂道があり、富田大尉は早くも之を見附けましたゆゑ「それアレが坂道だぞ、壁上を占領せいと云ふより早く、右手の坂へ登らんと致します」と、敵も豫め此の坂道にて防戦するの準備を爲し、煉瓦やら木材やらを以て、防禦工事築き、是に據つて、我軍を喰ひ止めんと致しますので、又も坂道の途中に於て、一大激戦となりましたが、富田大尉に次いで進み来りました中隊長は姓名は故意と言ひません……否な聞き洩しましたが、矢張り富田大尉に續いて勇ましく第一門を突進し、次で第二門を入り、城壁内の市街口に出でたる時、如何なるものか、一寸立止まつて了ひました、中隊長が立止まつたので、背後より續行して来た兵は皆、一時一寸立ち止まつて了ひました故に、第二門から第一門其の外方に至るまで、我兵がブーンと繋がつた儘に立止まつた、恰も此時、敵が其の南方なる城壁上の出ツ張ツて居る所から、機關砲即ちガットリン砲を打ち出した、したから堪まりません、第一の門外に立ツたる我兵はバタンと打ち倒されて了ひます、聯隊長竹中大佐は之を見るや、聲を限り「前へーッ」と號令しました、尤も此中隊長が立止まつたのは、僅かの間であつて、直ちに又た前進し、富田大尉に次いで坂道へ登り来りて、富田中隊に力を併せて奮戦いたしましたので、敵は最早是までなりと思ひしか刺し違へて死する者もあれば、壁上から内部に飛び下りて死する者、或はピストルを以て自殺する者もあり、中には三名位にて我軍へ切込んで来て、討死する者もあつたやうで

ムいます、此邊の話は、總て竹中大佐が北京の得勝門外で、私に話して下されたのです、前日に陳へました如く、富田大尉も、城壁内部の坂道を、壁上へ登らんと致しまして、途中に激戦を生じ、又た其の次なる中隊長が部下を率ゐて、富田中隊に増加したる頃、其の後より進む、我兵が、第一門と第二門の中間に於て、四方の壁上から激しく射撃されて、打倒される者もあつた、此の第一と第二の門の間が樹形になつて居るのですから、東西南北四方の高壁上から、打つ事が出来るのでムいます、故に敵は一方を坂道にて喰ひ止めると同時に後より續く我兵を、樹形の中に於て應戦に於て了ふ心算を見せました、其の四方の城壁上より打ち出したる銃砲の烈しきと云つたら、一通りでムいません、されば我兵の打ち倒されて了ふ者も多く又た敵陣は中らすとも倒れて居る味方の兵に蹴倒して倒れますと、其の後より進む兵が又蹴倒れて倒れたり、或は倒れて居る者を踏んだりして其の混雑々踏と云ふものは、勿々筆舌の及ぶ所ではありません、一時は實に無双の苦戦に陥りました、併し其中に、漸く敵は堪へ兼ねて、前日に潰へたる如く、或は自殺し、或は刺違へ又は兵卒等は壁上を逃げなど致しますので、此の樹形の中へ打ち込ん銃丸も、緩慢になつて來ましたから、竹中聯隊長は一時後より進む兵の行進を止めさせて、聯隊長は「サ、此の間に、早く倒れて居る者を起せ、負傷者は後方へ送れ」と號令したので僅かの間に、残らず抱き起して了ひましたが、若し此時、此の行進を一時止めると云ふ事をしないで、此儘に進んだならば、それこそ尙ほ幾倍の多き傷者を生じたるか知れなかつたやうでムいます、竹中聯隊長の指揮宜しきを得たる爲め苦戦の割

合に死傷を蒙らしめたので、倍又此方は旅團長塚本將軍で、實に戰場を數々經た
る人でありますから、其身將軍の地位に在るに雖も、常に必ず士卒の直ぐ後方に在つて、殆んど士卒と同
じやうに、敵陣を冒して進みますが、此時も亦歩兵隊の前進する直ぐ、其の背後より爾も馬乘にて最も勇
しく進んで來られました、之を見るや、中隊長小隊長等皆等しく將軍の馬の回りに馳せ集つて「閣下、
御馬乘は危険です、此通り陣が烈しういいますから」塚本少將莞然笑つて「爾かのう……ナニ彈はそんなに
中るものぢやないが……では下りやうかい」悠々馬を下つて徒歩前進したうです
東直門の方の話は、一寸も預りにして置いて是から朝陽門の破壊に取究る事と致します、前にも風々演
べたる如く、工兵第五大隊の第二中隊の土屋大尉は、本日前より、苦心に苦心を重ねたる甲斐もなく、敵
の抵抗の頑強なりし爲、どうも晝中は破壊の功を奏する事が出来ません、そこで今夜こそ、奮然しても
月の出る前に目的を達せなければなりませんので、土屋氏は部下の將校下士卒に、能く其の意を訓令し
まして、午後八時に準備を爲し城外市街の町外れに在つて、時機の來るを俟ちつゝ居りますが、土屋大尉は
其部下を選抜して、三組に分ちました、第一は田坂少尉(久八)をして兵九名を率ゐしめ、第二は宮原中尉
をして兵八名を従へしめ、第三は大尉自ら九名を引率して進み事と致しましたが、時に土屋大尉は田坂少尉
宮原中尉以下に向ひまして「いよいよ本隊は、八時から九時の間、月の出る前に、任務を全うせなければな
らぬと決して、斯の如く三組に分ちたのであるが、正面橋梁を越へて行んとすれば、怎樣しても敵の眼に

入り易いから、一丁位下手の方へ迂迴して、堀の淺い所を徒渉して行つたならば、却つて敵の眼に懸るまい
と思ふのであるから、其の心算で準備されい」と訓令しますると、宮原中尉が「中隊長殿の御意見は、至極
宜しからうと思はれます、しますると堀を越へるには裸體になつて行つた方が、敵の眼に入り難いぢやらう
と思ひますが」土屋大尉は「成程宜しからう、是は至極甘い考へぢや、では裸體と極めやうと、茲に於て工兵第
二中隊の方は、裸體前進と決定して其の準備を取懸り、爾處して居る中に時刻が好くなりましたので、第一
なる任務を授かつて居る田坂少尉久八君は「サア出發せや」と自ら最先に立ちつゝ、南方の家屋の中の破壊
穴を潜り、前進致しまする、之に従ふ九名の兵も、少尉の背後から順々に進んで、遂に外れの家まで進
んだ時、少尉は「サア皆裸體になれ」と、手早く一同白の軍服を脱ぎ棄て、眞ッ裸體となつて了ひま
したが、如何さま此方が敵の眼に入り難いので、田坂少尉は、矢張自身最先に立つて進み、橋梁
より殆んど一丁も下手に來つて、田坂少尉は密かに堀の中に這入りましたが、水は膝の所までしかないので
全く此の盛夏期に雨の少なかつた爲で、土屋大尉は
一體北清地方は、八月は勿々雨の降る所であるさうですが、此處は寔に雨の少なかつたのは、聯合軍に取つ
て此上もない幸福で、いよいよ、されば此の堀の水の至つて淺かつたのも是が爲であつて、田坂少尉等は
何の苦もなく向ふ岸に達し城壁の下に馳せ入るや、少尉は「サア駆け足ッ」と、亦も眞先に立つて馳せ出
しましたが、間もなく朝陽門の第一門に達したので、直ちに黄色薬を装置し、之に點火して退くや否

何か食つて居りますから、豊田大尉は「何を喰ふのぢや」と言つて聞く。敵奴飯を焚いた儘逃げたんですから、それで今喰べて居ります。豊田参謀は笑ひながら、馬を進めて壁上を東直門の方へ行かんと致しますと、其の途中に、十六七才の義和團匪が一人我兵に捕へられて居りますが、我兵は殺して丁へと言ふ者もあるし、可哀想に未だ小供ぢや、死して遣つたが可からうと云ふ者もあります。豊田参謀は側に近寄つて能く見ると、如何さま未だ少年であるから「そんな年少な奴を殺すは可哀想ぢや、助けて遣れ」と言はれましたので、遂に放免して遣ると、彼は大いに喜び、豊田参謀の方に向ひ、伏し拜んで立去つたさうです。豊田参謀は此の様子では、師團長の心配された同志打の憂ひは決してないから、先づそれだけは安心を致しました。

豊田参謀は尚ほ北の方へと壁上を前進すると、頓て塚本將軍の居らるゝ所まで進んで参りました將軍は此時一個少隊だけを護衛に従へて、東直門の此方なる壁上に居られました。豊田参謀は將軍の前に進んで「禮を爲し、閣下も目出度うございます。少将、イヤ豊田参謀か、師團長も御無事ぢやらうのう。」豊田「ハ、師團長閣下も眞鍋旅團閣下も、福島閣下も、皆御無事でございます。師團長閣下は、東直門から入つた兵と朝陽門から進入した兵と、同士打するやうな事がありはせぬかと、それを太たく御憂慮なさいまして、小官に往つて、能く注意せいと被仰りますので、それで小官が参りましたが、先づ何事もなくて幸ひでございます。塚本將軍默然と笑ひながら「イヤ幸ひにして其の心配はなかつた、両方が同時に破れたら、怎麼か分らん

かつたが、東直門の方が些し早かつたので東直門を破つた兵が、壁上を進んで、已に朝陽門に達せんとすると、殆んど同時に朝陽門が破れたのぢやから、同士打の憂ひはなかつた、それから第一大隊は東直門から、同じく壁上を北方へ進んで、最う東北隅の角櫓を占領して居る。此の東直門と安定門の間に在る角櫓に達して居る。豊田「ア、爾でムいませうか、それは御手廻しが宜しうございました。師團長閣下へ報告致しましたら、嗚呼喜びでムいませう。」日本人が北京くと言ふたのも久しいものぢやつたが、とうとう北京へ來られたのう。イヤ何しろ此方は夜が明けなくては仕方がない、まア夜明けを俟つのぢや」と言つて居る時、誰とも知らず「アア花火が揚がつた揚つた」と叫んだ者があるので、見ると如何さま交民巷、即ち各國公使館所在地の方に、見事な花火がボン／＼バチ／＼揚つて居りますから、豊田参謀は、之を見て、ア、多分彼處が公使館の所在地でありますな、花火を揚げるのは、我々救援軍に其の所在地を知らしめる爲でムいませう。」ア、爾ぢやア、龍城者が今夜の喜びは手の舞ひ足の踏む所を知らぬ程に、雀躍して喜ぶぢやらうと言はれました。豊田参謀は塚本將軍に別れを告げ、元來し道へ引返しますと、此時已に朝陽門樓は焼け出しました。

話し少しく前に戻りまして、彼の露國軍の方から、東便門を米國兵が破つたからと云つて参りました時、山口師團長は先づ由比参謀を、早速其方へ遣はしになり、又歩兵第十二聯隊を率ゐて、福島少將が行くこと云ふ事に極まりましたが、十一聯隊の將校兵士は手早く夕飯を食し終りまして、出發致しました。途中随分急

行しましたが、道路が好くありませんので、東便門へ着致しました時は、己に午後七時でございました。福島
 將軍馬場上から見ると、如何さま東便門は開いて居りますが、後に、能く／＼聞き糺して見ますと、全く米
 國兵が開いたので、米兵十數人が、城壁上に攀ち登つて、中から開いたこの事でありませうけれども、其の詳
 細は知る事が出来ません、何しろ見事に開いて居るので、是から這入つて崇文門を指して行進致し、漸く崇
 文門外に達しますと、門外には露國兵が唯ワイ／＼騒いで居るのみで、崇文門は未だ開いて居
 るやうで、そこで福島少將は、露國人に其の様子を聞いて見ますと、彼等は言ふに「崇文門を入
 れば、最う公使館所在地へは直ぐだ云ふから、我々は此處まで来たが、崇文門は勿勿堅固にして、容易に
 入る事が出来ません」と言ふて居りました、唯彼等は器々ど打ち騒ぐのみであります、時に十一聯隊の副
 官林大尉が露國兵の股の下を潜つて、門扉の下の方を覗いて見ると、一尺三寸ばかり門扉の下が隙いて居
 る、林大尉は大膽に「日本兵此處から這入れ、露國兵の股の下を潜つて這入れ」と呼び立て
 る、先には勿論日本語だから分りませんが日本兵等は早くも之を聞き附けて三十名ばかり我れ
 しやがるのや、可厭にチヨ／＼しやがる兵だ、と／＼言つてる中に、忽ち三十名ばかり門内に入りまし
 た。

(二百九)

長らく皆様の御愛顧を蒙りました、日本の旗風も、面白い話や、惘れな話は、日本軍を始めとして、聯合軍
 が北京城内へ侵入してから後に多いので、それを語る事に仕舞ふのは惜しいやうな心持がしますから、餘り
 長きは御迷惑とは思いますが、是からいよいよ北京宮城諸門の戦争より清帝都落の事實談に取違ふ事と致し
 ます、今三十回の御辛抱を願ひます、切我が歩兵第四十一聯隊の第一大隊が、朝陽門を占領し終るや、山
 口師團長より、四十二聯隊長大佐渡邊章君に「君は、朝陽門より入つて前通し、宮城を占領せられい」と命
 令がありましたから、渡邊大佐は豫て案内者と定めてある、東京日々新聞の記者黒田甲子郎君を先に立て、
 前進致しましたが、數丁来りますと、四辻になつた所がムいまして、其所に到るや、不意に敵はポン／＼
 バラ／＼と撃ち出しました、眞ッ先に立ちました黒田甲子郎君も、不意の事ゆゑ大いに驚いて、思はず
 飛上つて「敵だ」と叫びながら右手の人家の軒に馳せ入りました、其の後より進み來つた我が四十二聯
 隊第五の兩中隊は忽ち散開しポン／＼と一齊に打ち出しました、敵も亦連發にて撃ち出しま
 したから、第二大隊長杉岡少佐は之を見て「第五中隊増加せよ」と命じ、第五の一個中隊だけ増加せよす
 と、ハヤ敵は逃げ出しましたから、難なく此處の敵は追ひ拂つて了ひました、それから又も黒田甲子郎君を
 最先に立てまして、進んで宮城の東安門まで進みますと、此處には可成優勢なる敵が居りまして、我軍を

見るや、盛んに撃ち出しました。我軍の眞ッ先に立ちたる第八中隊と第五中隊は「それ突込め」と、兩中隊と合せて殆んど四百人「ツツツ」と、喊聲鋭く突進し、門に取附くや、兩中隊の兵士等は力を合せて門扉を打壞して了ひました。大隊長杉岡少佐直次郎君は、後方にあつて、是を見るより「サア早く進入せい」と號令して、自ら先に立つて、他の二個中隊を率ゐ、宮城の東安門を占領して了ひました。スルと、敵は東華門より之を見て、打ち出したく、頗る烈しく撃ち出しますので、渡邊聯隊長は第二大隊へ直ちに東華門に前進せいと命じ、それから第三大隊長少佐堀江不可止君に向つては「第三大隊は第二大隊に續行して、東華門を占領せられい」と命じました。兩大隊長は部下全隊を率ゐ、第二大隊が先頭となり、第三大隊が續行して、敵陣の猛烈に飛來る中を、兩大隊長とも殆んど眞先に立つて、突進致しましたが、東華門を去る事百メートル位所まで進撃した時、飛び來りたる一彈は、第三大隊長少佐堀江不可止君の肩先に中りましたが、幸に微傷でありましたから、堀江少佐は毫も屈せず益々聲を厲まして號令して居ります。然るに此處を守備する敵兵は、餘程精銳なる兵と見せまして、最も頑強にして容易に退却致しません。聯隊長渡邊大佐は此の様子を見て大いに憤慨なし「惜づく敵の舉動である、此方は宮城の事であるから、遠慮して大砲を撃たないのに、それをも察せず、斯まで頑強に抵抗するとは頑固な奴原ぢや、好しツ短兵急に攻め立て、一舉に取つて了へ」と、勇猛無双の渡邊大佐であるから、今や將に突貫の號令を下さんとする時、ヒューッと飛び來つた一彈、大佐の左足に命中したから堪りません。這の大佐も踵跟々として、動乎と其處に仆れました。

されども大佐自身には、未だ足を撃たれたと心附かず、立ち上つて號令せんとすると、復た踵跟として再び挫と轉びます。側に居た兵卒は大佐を抱き起しながら「聯隊長殿も足に負傷を」と言つたのは、彼は大佐の軍服に血の染み居るのを認めたからでうまいませう、徳言はれて渡邊大佐も始めて心附き「ムッ俺は撃られたな……残念……オイ堀江を呼べ」と、直ちに第三大隊長少佐堀江不可止君を呼びましたので、堀江少佐は急ぎ聯隊長の許に來り「聯隊長殿御負傷ですか」「ム、負傷ぢやがナニ些細ぢや微傷ぢやから心配する事はな」と言ひつゝ、大佐は堀江少佐の肩に纏着して居るのを見附けて「ヤ、君も負傷か」「オイ小官こそ、眞箇の微傷です、唯肩を擦過ただけです、何ともありません」「爾か、では君に聯隊長代理を命ずる、此名譽ある聯隊長代理を確乎行られい」と命じましたので堀江少佐は「ハイ謹んで領承しました、名譽ある聯隊長代理は確乎行る心算ですから御安心を願ひます」と應へたので、茲に歩兵第四十二聯隊長大佐渡邊君は、其の聯隊長代理を堀江少佐不可止君に命じて置いて、其身は擔架に乗せられて後方へ退きました。私は此の渡邊大佐の許へは、佐藤將軍から、添書を貰つて参りまして、北京の病院で目に見えました。さて堀江少佐は聯隊長に代つて指揮を取り、速かに此の東華門を破壊して、是より宮城内へ進入なさんと、頻りに焦燥とすも、敵は意外に頑強であつて、能く防戦に力め、怎麼しても退却する様子が見えませんが、流石の堀江少佐も憤慨に堪兼ね「悔氣得狼なア、敵の奴原が、此處で徳持ち堪へやうとは思はなかつたが、是と云ふも宮城なる事を遠慮して、大砲を附けなかつたからぢや、大砲をへめれば何最う譯はないが、

是は怎麼しても師團長閣下に爾云ふて、砲兵を牽越して貫はんければ不可んわい」と是から直ちに傳令を師團司令部へ送らする事に致しましたが、是より前、山口師團長は朝陽門の門樓に在つて、八方に注意して居ります。宮城の戦開次第に烈しく、敵は容易に退かぬやうで、いふから、師團長は「堅固な宮城の敵は意外に強く抵抗するやうなや、是は皇城と思つて遠慮して、大砲を附けなかつたからぢやな」中將如何と云ふ旨いませう。彼等今に及んで抵抗するのは、或は皇帝陛下を遠く落し参らする間、防禦するの事も爾でいませう。山口、爾がや、或はそうかも知れぬ、止むを得ん、砲兵を遣つて早く落してはうわい」と言つて居る所へ、傳令が参りまして「四十二聯隊長、渡邊大佐負傷」と報告しましたので、師團長始め人々「今になつて聯隊長を負傷せしめたとは残念である」と云つて山口中將も頗る慨歎せられます。間もなく又一人の傳令が参りまして「東華門の敵、頑強にして容易に退くの色なく、我軍傷者益々加はります。間もなく又前進せられん事を請ふ」と云ふ意味の報告を、堀江少佐から齎したので、師團長も是れでは宮城と思つて遠慮したが、爾云ふ事ならば止むを得ない云ふ所から、直ちに野戦砲兵第十六聯隊の第三中隊に前進を命じたので、中隊長青田大尉は、速かに部下を率ゐ、六門の野砲を曳いて前進しますが、野砲は馬六頭に二門を曳き、砲兵も之に乗つて走る事が出来ずから、殆んど騎兵と同様に進退が出来、其の速力の急なる事は驚くべきで、故に青田大尉は馬足の歩調を以て前進し来りましたが、八時三十分には東安門の此方に着きまして、東安門の東方七百メートルの所に砲列を布いて、東華門を撃ちましたが、敵は此の

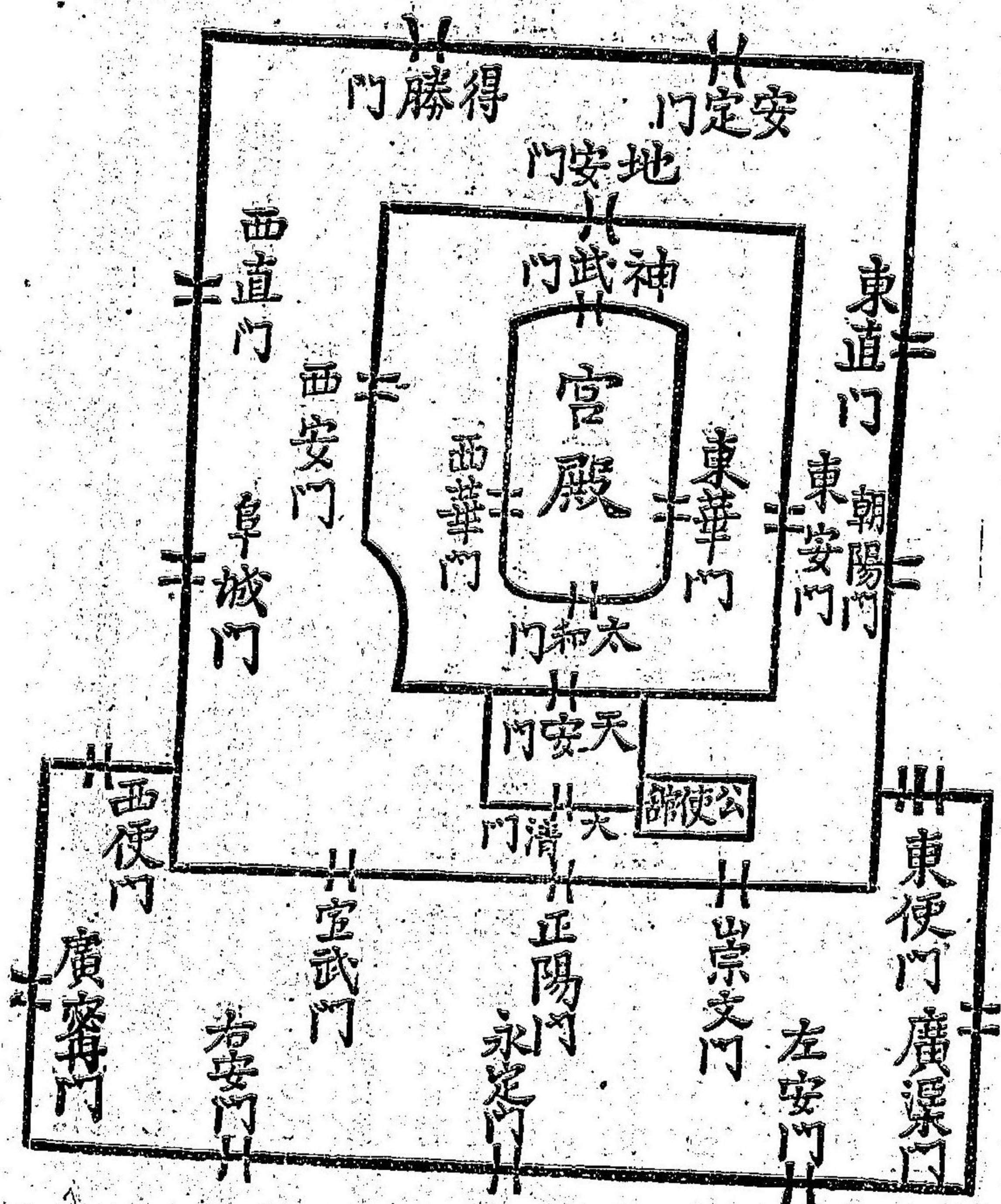
砲撃を始めると、何れへか姿を隠して下りましたゆゑ、歩兵は是を見て「ソレ、行けッ」と云つて進まんと致しますと、又姿を顯はしては激烈に打つて来ますゆゑ、容易に進む事が出来ません。又大砲を撃ち出すと矢張り込んで了ふと云ふ有様で、殆んど東直門朝陽門を攻めた時と同じで、いふから、青田大尉は「矢張り夜に乗じて、工兵の力を借るのかな」と併し爾工兵にのみ功を奪はれると云ふは残念ぢや、待てッ、今些し前進して、モツと近くから撃つて見やう」と、是から前進して四百メートル位の所まで参りましたのが、十時半頃でありまして、此處から盛んに打ちましたが、壁と云ひ門と云ひ頗る堅固にして、勿々以て破れませんでした。其日はどうも宮城の占領が出来兼ねましたが、此日の戦は意外に敵の頑強なりし爲め、死傷も比較的多くありましたが、併し敵ども此處で砲まで防禦する心算はなく、深夜に至つて逃げ去つたものと見えて、翌十六日の朝になると敵の姿は一人も見えせん、そこで哨兵だけを門前に置いて、他は皆な引き上げました。

宮城内の戦開は、諸門殆んど同時に起つて居りますゆゑ、別々に申演へると致しますと、怎麼しても、先へ諸頭が進んだり、又た後へ戻つたり致しますが、是は萬止むを得ませんゆゑ御推譲を願ひ上げます。併し又た宮城の北門へ向ひましたのは、四十二聯隊の第三大隊、即ち井上少佐の率ゆる隊で、いふから、十五日の晝些し前に地安門へ迫りましたが、門扉が確く閉ぢてあつて、外よりは容易に開く事が出来ません。門内には、敵が居るに違ひないですが、なりとて、我軍が此處まで進み来るのに些しも打ち出しませんから、井上

大隊長は心の中に、是は此の門を守備して居る敵の隊長は、餘程沈着強膽な奴に違ひないから、慢然した事は出来な、妄りに門内に入らんとすると、如何なる損害を蒙るも知れぬ、と懸考へましたので、暫らく躊躇して居りますと、井上大隊長の側に居りました上等兵栗柄健吉が「大隊長殿、彼の門扉の下に隙がありますから、彼處から這入つて開いたら、開くたうと思ひますが」井上、成程、どうか彼の隙から這入つたら、這入れるぢやう、側這入つて開けッ」と命じたので、栗柄上等兵は「領承りました」と言ふより早く、背負袋を解いて其處に置き、銃だけ携へて、勇ましく馳せ出しましたが、驟て門扉の前に達すると身を屈めて、暫らく門扉の下なる隙間から、中を覗いて居りましたが、銃を左の手に携へたる儘、どうも其隙間から潜つて門内へ這入りまると、三十間ばかり前方に、敵兵數十人屯集して居りましたが、それを見るより烈しく撃ち出しました、栗柄は豫て期した事ゆゑ、毫も驚も騒がず、從容として敵の銃弾の雨注する中に立つて門に兩手をかけ、ノッヤと許りに開かんとする一刹那、飛び来た一彈は、左の腕に中りました、それを感しても構はずして、どうも關口を外して下りましたが、此時又も飛び来た一彈丸は右の腰の邊へ命中したが、それでも尚ほ屈せずして、ロロロ脚を踏めて、門扉に右の片手を掛け、満身の力を籠めて、遂にギョッとして扉を開いて了ひました、開くと同時に其處へハッパリと倒れて了つたのですが、ナント讀者諸君勇敢と云ん平、豪氣と云ん平、實に稱賛するに餘りある勇士ではございませんか、此の兵士の功を彼の廿七年平壤攻撃の際、玄武門を開いたと云ふ原田重吉と比べますれば、此の方がノッヤと其の功が高

く勇ましいので、原田重吉も玄武門を開いたには違ひないが、佐藤將軍や、三村大尉に聞いて見ると、世人の噂する程の事はなく、全く此の地安門を開けた栗柄の方が、遙かに勇敢な行方であつたのです、此等が歴史に立派に姓名を載て後世に傳へたういふ、サア地安門が開きましたので、井上大隊は潮の如くに突入して、回門を占領して了ひました、ヌルと敵は景山の邊から、盛んに打ち出しました、追々増加するやうでありましたが、我が井上大隊の第十一中隊長坂戸大尉は、真先に立つて「それ敵の増加しない中に撃退して了へ」と勇ましく進みましたが、飛び来る敵彈に股を打たれて其場に動ず倒れました、されども勇猛なる大尉の事ですから、屈せず構はず指揮します、其中に、看護手が馳せ着けて、手當を施しましたが、勿々の大傷ゆゑ、直ちに後方へ退却致させました、併し敵も我が兵の烈しき攻撃に堪へかね、遂に退却して了ひましたが井上大隊長は妄りに之を追ふて前進致しませぬ、何故ならば豫て司令部から訓令があつて、宮城内へは無暗に這入るな、門を占領したなら其處を守備して後命を俟てと云ふ事になつて居りますゆゑ、それで敵を追ふ事を止めて、此の地安門に一個中隊だけを殘して置きまして、他の隊は一先づ引返しました然るに暫時にして又た敵が三四百人出て参りまして、地安門に居る我兵に撃つてかゝります、我兵は一個中隊ですから、是に敵對するは、勿々骨が折れますが、中隊長は「斃るゝまで戦れ」と號令して、假令一人斃らす戦死するも、日本人たるもの一度占領した處を退ぞいて敵に渡すものかと云ふ意氣込みにて、中隊長を始め、全隊残らず必死になつて戦ひますゆゑ、流石に優勢なる敵勢も、どうも我兵を退けかねると思つ

門城の外内城京北



たか、退却してしま
したが、三十分ばかり
経つと、又もや優勢の
敵が襲ふて参りました
我が中隊長は、是は容
易に防げぬと見ました
から、部下を分ちまし
て、左右の人家に入ら
しめ、人家から敵を狙
撃致せました、それで
なくては、敵が優勢ゆ
ゑ、逆も防戦警束なし
と見て取つたからで
います、ヌルと敵も亦
人家に入つて打ります

ゆゑ、我が中隊長は「彼の人家へ放火せいで」と號令して、地安門附近の敵の據るへまやうな家屋へ火を
放たせましたが、折ふし風が些し出て参りましたので、火勢は忽ち猛烈となつて参りまして、地安門から
此の附近一帯の地に延焼致しまするので、敵の狙撃も止んで了ひました、此の十五日は是より敵は参りませ
んでしたが、翌十六日になりますと、敵兵又も此處へ襲ひ来りますのみならず、彼等は、死を極めて出
て来つたものと見えまして、昨日に比すれば、一層猛烈に攻め来りまして、其の射撃も、我兵僅々一個
中隊にては、些と防戦がしかねるので、中隊長は敵に襲はれて、援兵を乞ふのも殘念であるし、
殊に敵の敗兵に襲撃されて、防ぎ兼ねたところでは、面目ないと思ひますのゝ、一生懸命になりまして防戦
致します、敵は我兵の小勢なるを侮つたのか、それとも彼等は是非此處を破つて逃ぐる心算であるのか知り
ませんが、四五百人と云ふものは、ウワツツと威嚇を揚げつゝ、突進して参ります、其の勇猛なる事
と云つたら、殆んど是まで支那兵の舉動としては見た事のない位な有様であつて、稍四ノメートル即ち三十
間足らずの所まで、突貫して参りました

(二百十)

敵は珍らしくも勇敢に、我兵を目標けて突貫して参りました、我兵は意外に思ひながら、一生懸命になつて
之を撃ちましたので、さう〜敵を退けて了ひましたが、餘程骨が折れたのであります、然るに午前十時

頭になりすと、又も以前より優勢なる敵兵が襲来しましたので、我が此處を守る中隊は、最う今度こそは死を決して戦つたが、敵はいよ／＼益々勢ひ込んで突進して来ましたので、流石の我兵も堪へ兼ねました所へ恰も好し、他の我が一個中隊の兵は、井上大隊長の命に由つて、援助に来て呉れましたので、大いに勢を得、兩中隊合して敵に逆襲したので、敵はどう／＼四十名ばかりの死體を残して置いて逃げ去つて了つたさうですが、此の四十名ばかりの死體を残して退却したと云ふ事は、想像し得られるのであります。此の戦争が如何に激烈であつたか、又我が兩中隊が如何に猛烈に逆襲したかと云ふ事は、想像し得られるのであります。此時井上大隊長も此の地安門の事が心配になりますゆゑ、自ら馬を進めて此處へ見に参りましたが、此の戦況を見て大いに喜び「イヤ、慥も勇ましいく、併し敵も意外に頑強ぢやが、是は想ふに、宮城内の逃げ後れた敵が、一方を撃ち破つて、逃げやうとして、それで慥う勇敢に撃つて出るぢやらう」と言つて居ります所へ、後方から一人の我が参謀官が馬を馳せて参りましたので「ヤア参謀官が来た、誰であるかなア」と見て居りますが、それは遠くても参謀官と云ふ事は肩に附いて居る即で知れるのでありますから、誰であるか、参謀官には違ひないがと云つてる中に、始め、此處に居る將校は一人として此の参謀官を知る者がなから、皆不審に思ひました、軍服と帽とを見れば中佐に違ひないが、師團司令部附の参謀官なれば、大隊長始め將校も兵士も皆知つて居る筈ですから、一同曉得がゆかすして居りますと彼の参謀官は莞爾笑ひながら、井上大隊長の側に近附いて参りました、井上少佐は馬上から一體致しませれば、参謀官も亦答禮を爲し

他の將校ども、互に禮の終つて後、参謀は徐かに口を開きまして「小官は柴中佐です」と一言云ひましたので、大隊長始めそれでは龍城隊の指揮官として、長間の龍城に其の指揮の宜しきを得たる爲め、遂に多くの龍城者をして、敵の爲に塵殺の禍害を免がれしめ、其の智謀良計、各個人の間に噴々として持て囃されて居る柴中佐五郎君は、此の人にてありたるよなど、人々自ら敬意を表はします、柴中佐は「慥もやね、敵は屢々来るかね」井上少佐「ハイ、随分五月蠅く襲つて参りますが、一同必死になつて防ぎますので、退けては了ひますが、勿々骨が折れます」柴中「爾ぢやらうねえ、吾輩皇城の指揮をせいと云ふ命令を受けて来たのぢやから、是からモツと前進して、神武門を占領して了はう」井上少佐「ア、左様でムいすか、小官は又唯此地安門を占領して、妄りに宮城内に入るな復命を焚て云ふ命令でしたから、此處だけを取つて、是から内へは這入りませんでした」柴中「爾ぢやらうねえ、無暗に宮城内に入ると云ふ事は宜しくないから」と言つて居る所へ、今柴中佐の来た方から、一騎の憲兵が馳来りました

柴中佐が何が故に今此の所へ来たるかと云ふに、十四日の午後、福島少將が公使館所在地に到りまして、龍城者に面會し、其の夜半過ぎ、即ち夜の一時半頃には、眞鍋少將も亦た公使館に到着致しました、翌十五日から十六日にかけては、所々の残兵を追ひ拂ふ爲、入方に小戦争がありましたが、十六日の午後には、大に概に殘兵も逃去つて了ひますし、稍北京城内の整理も就きかゝりましたが、未だ宮城には殘兵が居て、勿々頑強に抵抗して居ます、此時山口司令官は司令部を日本公使館に移しましたが、兎に角成るべく早く宮城

内の敵を退けて、整理を就けて了はなければなりません。福島將軍、石橋中佐及び其他の參謀官と種々御評議の上、柴中佐を遣つて、指揮を取らせられた方が宜しからんと云ふので、山口師團長は中佐を呼び出して、「柴中佐君は、長らくの籠城、心身の疲勞も一方なるまいから、假令休息させたいと思ふたが、慥も今爾がれぬ場合なるから、遂に氣の毒だが、今一と骨折つて貰はんければならぬ。」と云ふので、柴中佐も入りませぬ。山口も知る如く、城内も漸く靜謐になりかゝつて来たが、柴中佐も城内の殘兵が、勿々盛んに抵抗して居るから、成るべく速かに整理を就けて了ひたい。今は地安門方向に遣つた隊が、敵と衝突して居て、昨日から彼の方面が、容易に陥かにならぬやうなから、君行つて一ツ指揮して行つて貰いたい。併し言ふまでもないが、宮城内に深く入る事は、遠慮せなければならぬ。」「ハイ承知しました。では安地門から尚ほ前進して神武門邊まで占領する事にしませう。」「山口も、其邊の事は君が委しからうと思つて、疲勞して居る君を煩はすのだから、其の心算で行つて呉れ。」「誰領りました」と、柴中佐は領承して、直ちに憲兵曹長と憲兵伍長とを二騎從へ、無論自分も馬乘にて、公使館を出でました。憲兵曹長は先頭に立ち、伍長を後に從へ、中佐は中に立つて、馬を驅つて参ります。遂に宮城の方へ近附いて参ります。些し淋しい所へ差かゝりました時、五六名の義和團匪が銃を擡へて、横手から馳せ出しましたが、柴中佐一行の前を横切つて、向ふの人家へ入りましたので、憲兵曹長が「中佐殿、油断なれません。彼等は團匪に相違ありませんが、銃を擡へて居りますから」と言ふと、中佐は笑ひながら「サニ心配ない、何とぞ

し得るものか、最う何も為し得る事ぢやないから、心配するに及ばぬ」と言ひます。曹長も伍長も、背負つて居る銃を卸すのを止めて了ひました。さうして三十間ばかり行つたと思ふと、果して彼等は、後背から狙ひ撃ちたに、ボン／＼パラパラ打ち出しましたから、流石の中佐も大いに驚く所へ、又もや横手の路に隠はれたる三名の團匪等が、矢張り／＼／＼／＼と烈しく打ち出したが、憲兵曹長も伍長も柴中佐の身の上を思ひますから「中佐殿、早く／＼退きなさい。此處は我々二人で防ぎますから」と言ひつゝ、二人は馬より下つて銃を取らんとする一刹那、飛び來つた敵弾は、痛はしくも憲兵伍長の股に命中しましたが、彼は些しも屈せず、銃を取直して敵に向ひ打ち出しました。茲で話頭が些しく後良りを致しまして、安地門を得勝門との占領に取違らなくてはなりません。前塵を演べました如く、十四日の夜、朝陽東直の兩門を破つた後、我が日本軍は歩兵第四十二聯隊の第二大隊、即ち杉岡少佐直次郎君の率ゆる隊と、同廿一聯隊の第二大隊、即ち西山少佐敏君の率ゆる隊とにて、安地門を指して進撃致しました。尤も是は東直門から城壁の上を傳ふて、角櫓の所に到り、それより進んで安地門に近附きましたのは、恰と夜の明けなるとする頃でありますが、我兵が安地門を去る四百メートル位の所まで参りますと、敵は早くも撃ち出しました。我が將校は「製歩に進め」と號令して、些しく駐足の歩調を以て突進し、敵との間百五十米突位の所に到るや「突込め」と云ふ號令にて、勇ましく突貫すれば、敵は支へ兼ねて逃げ出しましたが、皆練兵場の方へと逃げ行きます。我兵の一部は是を追撃しましたの

で、後に見ると、此の練兵場には敵の死體が随分澤山横たはつて居たさうでありますが、此方にも亦死傷は二十名ありました、是で安定期は占領したが、是から進んで得勝門を占領しなくてはならないのです、そこで廿一聯隊長の竹中大佐は、部下第一大隊長新妻少佐に向つて「君は其の部下を率ゐて、得勝門を占領せよ」と命じたので、新妻英馬君は領承して、直ちに部下を率ゐる「城壁」を前進して、十時五十分の頃に得勝門に達しますと、敵兵二百名ばかり居て、一時は烈しく撃ち出しましたが、我が新妻大隊の突進に遇ふや、狼狽して逃げ去つて了りました、故に難なく此の得勝門を占領して、其夜は此處に宿營を致しましたが、翌十六日に至りまして、塚本少將は此の得勝門に來られ「此の附近に端群王の邸があるに違ひないから、見附け次第に焼いて了へ」と命じたので、是から通譯官をして搜索せしめましたが、塚本將軍に隨從して居る通譯官川崎武之助君は、得勝門の城壁を下りて城内の市街に入り、兵士と共に彼方此方を尋ねまする中に、向ふの立派なる邸内より、年齡五十ばかりなる一人の男が出て來りまして、得勝門の方へ參りまするが、川崎通譯官は此男を見るに、普通の人でないと思ひますから、側に進み寄り「貴君は何人です」と云ふと「僕は私は決して怪しい者ではありません、軍人でもなければ義和團でもありません」と言ひつゝ、持つて居る羽團扇で頻りに扇ふ居ります、川崎君は重ねて「貴君は併し普通の士民とは見受けませんが、官吏でもないですか」と問ふと「はい、さう、其様な者ですが、併し微官です」と答へました、川崎君は又「では端群王の邸を御存知であらうから、教へて貰ひたい」と言つて聞くと「唯今私の出た家

が、爾も端群王の邸であります、さうながら私は端群王邸下に仕ゆる者ではございません、時々出入りを致しますので、今日も一寸參りました、端群王は今在邸でありますか」と尋ねると「最う疾くに北京を出て了つて邸内には居られません」と言ふ様子、些しも偽りとは思へません、其他の事を種々問ひ試むるに、知つて居る事は皆残らず打ち明けて、且つ言ふに「私は斯の如く包ます話しました以上は、お疑ひも晴れましたらう、決して怪しむべき人間でないと言ふ事が分りましたらうから、萬望通行させて戴きたういたします」

端群王の邸を教へた人物は、如何さま正直にして、些しも怪むべき所がないと言ふ事が分りましたため、彼の言ふが儘に通行して遣る事に極りました、川崎通譯官は「では今前の請ひを容れて通行して遣るから早く行つたが宜しからう」と云ふと、彼の喜びは一通りでムいませぬ、遂に有難うムいます、それでは聊か私しの御禮の寸志に是を呈しますから、意丁ない物ですが、萬望御受納下さいまし」と言つて、彼は道を通行して呉れる其の禮として、携へ居りました羽團扇を寄越して置いて、欣々通行致しました、川崎通譯官は是を持つて、塚本將軍の許へ來り、右の趣きを演べて、端群王の邸の所在を報告致しました、將軍喜こんで此の羽團扇を手に取りつゝ「では直ちに端群王の邸を焼いて了へ」と彼頑迷老爺の爲に或は殺害され、或は難に罹りたる者、何の位あるか知れぬ、實に今回の事變は、彼が其發頭人と云つても可なりぢや」と言はれまして、其の邸を焼く事を命じたため、茲に於て我が將校兵士等は直ちに放火しましたが、折節北

風烈しき爲め、見る／＼中に邸内一面の火となつて、炎焰天を焦し、煙は空に漲り道に親王の邸だけあつて其の構造材料の頗る宏大堅牢なる爲め、焼け落ちる音など聽て物凄き景を見て「ヤア愉快／＼、昔秦の始皇の築いた阿房宮は、四百餘里を覆壓する程の宏大なる建築であつたが、遂に楚人の一炬に灰燼となつて了つた云ふけれど、それは始皇君臣が自ら招いた禍であるし、今端王も此の宏壯美觀を驚かすばかりの邸をして、我が日帝國人の爲に一炬の計に灰燼とならしめて了ふとは、實に自ら招いた禍とは云へ、又た憐れべき至りである」と彼の端王の邸を救へた人の呈して行つた羽團扇を以て、頻りに風を呼びながら、其の焼け落ちる有様を沈平眺めて居られます。一寸餘事を申演へて済みませんが、此の羽團扇は、唯今現に私が所持して居ります、それは何故か云ふに、北京の得勝門外なる塚本將軍の許へ、私は二泊して歸つて、講談をお聞きに入れましたが、出立する時、將軍へも暇乞を致しますと、將軍は若干の金を紙に包んで下さいましたから、私は堅く是を解返致しまして「折角の思召は有難う存じますが、今回参りましたのは鐵餅を作る爲に参つたのではいけません、眞に材料を收集する爲でありますから、萬望唯成るべく好材料を得らるゝやう、部下の將卒に御内諭を願ひたい存じます、其代り講談は毎夜でも演りますから」と言ひましたら、將軍は笑ひながら「それでは是を遣らう」と言はれて、其の羽團扇を私しへ賜はりました。其時副官が私しへ此の羽團扇の謂はれ因縁を詳細に語つて呉れたのでいいます、それですから、私は是を大切に置いて置きますが、柄は紫檀で出来て居て、羽は何と云ふ鳥の羽やら、私しには分りませんが、鉄の種

く性の好い金具が附いて居ります、いよく是から日本兵が地雷火に罹る話しやら、清帝都落ちの實談、其他の珍談奇話に取替る事を致しませう、

(三百十一)

得勝門を占領したる我歩兵隊は、是から進んで西直門を占領しなくてはなりませんゆゑ、砲兵の来るを待ちつゝ居りましたが、先づ一個小隊だけを先へ遣つて、角樞を占領せしめんと致しました、それは斥候兵を出して、状況を偵察するべき必要があるので、四人の斥候兵を出しましたが、彼等は角樞の側まで馳せ到りました時、忽ち轟然たる音響がして、地雷火が破裂したから掛りません、憐れべし四人の斥候兵は、中天に吹き飛ばされて了つて、霎時の間と云ふものは、四邊濠々として眞闇になりましたので、後より續く我が兵も始めて地雷火であると云ふ事を知り「ヤア地雷に罹つた／＼、斥候兵が地雷で殺られた」ヤア残念／＼、サアも互に氣を附けら」と言ふので人々注意に注意を加へて行進致しましたが、遂に難なく西直門の敵を追ひ拂つて、同門を占領して了ひました、所へ、間もなく塚本將軍も参りました、ヌルと門の下に義和團匪が若干居りましたが、我が軍隊の門樓に達するを見るや、彼等は先を争つて逃げ出したゆゑ、「ソレ團匪が逃げぬぞ、捕へろ／＼」と追ひ蒐めて、五六人を捕縛しましたが、中に一人年齢四十才位な鼻下に髭を生やしました立派な人物がおりますから、通譯官は彼に向ひまして「お前は何人である」と云つて尋ね

ます。彼は冷然として、吾れは義和團の一人である」と應へたのみにて、眼を閉ぢ口を噤んで居りし通譯官は「成程義和團徒には違ひあるまいが、併し前の様子を見ると、普通の匪徒とは思はれない、團徒の中でも有力家であらう」と言ふと、彼は莞爾と笑ひまして「有力家と云ふ程の事でもありませんが、まあ首魁の幟に参し、些しは書策に與つた方です。姓名は何と云ふ」山東省の生れで張韓辨と云ふ者です、貴君方諸外國人は、唯義和團徒と云へば、皆モウ頑迷愚昧にして時勢を知らぬ暴人とのみ思召しませうそれは最う無理ならぬ事ですが、是は所謂玉石混合に見做したもので、我々團徒中にも些しく事理を解する者は憤慨に堪へません、如何なるに、我々義和團と雖も無謀に外國人を思ひ嫌ひ、一概に之を排斥せんとしたるにあらざして是には種々なる理由のあるつて思ひ立つたのであります、而して其の理由と云ふは、固露西亞人の我が國土を奪掠せんとするを憂ひ、露人排斥の企てを爲したるに基くと雖も、種々の事情より事志しと阻礙して、遂には今日の如き非運の境に陥り、諸外國を敵として戰ふに至り、連戦連敗の餘り、帝都は陥入られ、帝王は遠く蒙塵し、國土將に分裂せられんとす、嗚呼等悲しに生存命を、國家の亡滅を見んより、寧ろ死するの安きに若かず速かに殺戮せられよ」と天を仰いで浩歎致します、其の言と舉動を以て見るに、如何なる普通の頑迷愚昧なる匪徒と異り、確かに一見識有したる男と云ひます、人々大いに感心致しましたが、併し今此奴等助け放つと云ふ事は逆も出来ませんゆゑ、縛したる儘に短銃を以て擊殺してしました、此の男を始め、何れも皆な些しき惡法す、眼を閉ぢ合掌して、死に就いたるうで

あまりして、此の死状の從容自若として、卑怯未練の舉動のなかつたには、人々感し合つたのであります、
 槍聲處で又、話しは些しく後戻りを致しまして、皇城の西の方へは、西山少佐敏君が、其の部下大隊全部を率ゐて進みましたが、十五日の夜鐘樓まで進んで、翌十六日には、西安門に攻陥りますと、茲處にも若干の敵が居て、随分一時は戦ひましたが、遂に敵は逃げ去つて、西安門を占領しました、時に露國佛國の聯合兵も、北堂を救ふの目的を以て進み來りました、此の北堂と申しますのは、北京皇城の構内なる西北隅に大きな天主教堂が、此處に耶穌教民が三千餘人も逃げ込んで、籠城したのであります、其處へズツと前に、陸軍隊の中から佛國兵三十人士官一名、伊國兵十名士官一名、都合四十二名を遣つて、防戦して居ります、此外に僧正始め十三名の佛國僧で、二十名の尼で、支那僧徒等合して百二十名ありまして、支那兵が攻撃を始めて以來、公使館區域との交通は全く絶へて、眞の孤立で圍まれ、六十有餘日の長の間、公使館所在地籠城者と、此北堂とも、一度も交通が出来なかつたのであります、唯々公使館所在地籠城者は敵が北堂に向つて砲撃を加へたり、射撃をなしたりする音を聞いて、未だ北堂の落ちずに居る事を知り聊か人意を強うする事を得たのであります、併し此の北堂の籠城者は、公使館所在の籠城者に比すれば、又一層の困難をしたるうであります、防禦其他の計畫は、皆アウイニー僧正及びチャルラン副僧正の手でなりましたらうですが、敵は數百倍なる多數の兵を以て攻め來り、殊に新舊砲交へて十四門の大砲を有する

敵の攻撃に對し、六十餘日間能く持ち堪へたのであります。就中食物が非常な困難であつて、北堂龍城者の中に於て、死傷したる支那教民は四百人からありますが、其中にて三十名は敵弾に中つて斃れ、小兒や女の餓死したる者百二十餘人、地雷火に罹つた者が五十餘人、其他絶望して首を絞つた者、又は井戸へ飛込んで死んだ者、病死した者が八十人ばかりありましたが、此の一事を以て見るも、北堂龍城の困難であつた事は、大概推察が出来ます。殊更氣の毒であつたのは、援軍の到着する二三日前まで持ち堪へて、勇ましく防戦して居た佛國の士官は、大きな地雷火の發した爲に死し、伊國の士官は矢張之が爲に負傷し、其の他に僧侶一名、伊佛兵十二名死傷しました。私も一寸北堂へ行つて見ましたが、イヤハヤ實に何とも名状すべからざる慘憺たる光景でういます。却つて説く、露佛軍は北堂を救ふの目的を以て進軍し來り、敵を追ひ退けつゝ、大理石の橋まで進んで參りましたが、皇城へは容易に這入りませぬ、處へ又佛國のレー少將の兵が來つて、砲を西安門の側に据へ、此の附近に居る敵兵を攻撃し、伊國の水兵も之に加はり、どうも敵を追ひ拂つて了ひましたので、茲に全く北堂の圍みは解けて、龍城者は皆嬉し涙に咽せ返りました。此の北堂の龍城談を詳しく演じましたなら、それは勿々悲惨な話もあれば、面白い談話もいませうけれども、日本人が龍城して居なかつたから、残念ながら能く分りませんが、私は日本の龍城者が、外國人から聞いたと云ふて私に話して呉れましたゆゑ、唯それだけを演じて置くだけです。北堂に居た尼が、大砲彈の破片を拾つたのばかり、大きな茶籠に七杯もあつたさうでういます。何と諸君驚くべきではありませんか。

北京城の南に在る門、即ち宮城正門の真南に在る門を正陽門と云ひ、それを入つて宮城の眞つ正面に在るを大清門と云ひ、其の次が天安門にして、それから端門、此の端門を入ると午門になります。米國兵は此の午門まで占領しました。我が日本兵は、前に度々演べたる如く、東華門神武門西華門と此の三門を占領したので、宮城の入口は全く日本で三箇の門、米國で一箇の門を占領し、日米兩國兵を以て固めて了ひました。是から中は、眞の宮殿であるから、容易に入る事を許しません。番兵を置いて、最と嚴重に守備して居ります。そこで人々の心配されたのは、此の皇城の通過と云ふ事であつて、我が日本は、山口中將の師團司令部を、日本公使館に置いて、他は多く得勝門と安定門との間に宿營すると云ふ事に極まり、警務衙門を順天府に置いて、柴中佐をして専ら事に當らしめ、橋口守田の二大尉之を助けて日本守備區域の安泰人民保護の事に盡力して居りましたが、未だ勿々皇城通過は出来ませんので、四門は閉ぢた儘になつて、矢張三門は日本兵、午門だけは米國兵が守備して、無論一步も宮殿内へ踏み入らせぬ様にして居ります。と或日の事、宮殿の裏手の方に、神武門を守備して居る我が四十一聯隊の歩兵が、弗と耳を傾けて聞くと、門内にて何やら聒々絮々弄舌る者がありますゆゑ、門の隙間から、密と覗き込んで見ると、一人の乞食同様な、極く穢い服を着したる男が、何か言ひつゝ頻りに外に向つて手を合せながら、頼む様子をういますから、我兵は一驚を喫しました。「オオオオ不思議ではないか、幾干支那と雖も、宮城内爾も此の神武門の内、乞食非人が居やうとは思はなかつた。此奴を見ると全然乞食ぢやなア」と、成程、乞食ぢや、皇城内の乞食

とは意外ぢや、殆んど夢ぢや、何を言ふのか意味も分らぬや」と言つて居ります所へ、我が小隊長が一人降り
 歩いて、之を聞き「宮城内に食糧は賤得がゆかぬ、何かの間違ひぢやあらう」と、覗いて見たが、如何に食
 糧を食して思入ない、最も穢しき物です、さうして、彼が容貌を見るに、實に憔悴極まつて居て、如何にも飢
 餓に堪へられないと云ふ様な有様でいますから、小隊長は此の様子を熟々見て「此奴は飢餓に迫つて食
 を求むるに違ひない、何しろ言語が通ぜぬに由つて、能くは分らぬが、それに違ひない、想ふに門番ぢやら
 う」那箇那件、宮殿の門番か、此様な薄襦袢の服装では居ますまい、全く乞食が、怎麼かして間違へて、戦争
 騒ぎの中へ這入つたものでせう」それとも騒ぎに乗じて、賊でも働かうと思ひ、宮殿内へ這入つて、其中に
 居らるゝ小原聯隊長殿の許へ報告せらう」と言ひましたので一人の傳令は、東華門を指して馳せ到り、聯隊長
 大佐小原芳次郎君に其の趣きを報告致します」と、小原大佐は之を聞いて「フム、それは意外ぢやなア、
 兎に角通譯官を遣つて尋ねまして見やう……オ、通譯神武門へ行つてなア門内から何か言ふやうぢやな
 ら、何云ふ事を言ふのか聞いて来て見れ」ハイ承知しました」と通譯官は直ちに走つて、宮殿の裏手に方
 りまする神武門へ参りました。

小原大佐の命を受けたる通譯官は、神武門へ参りまして、門外から「何だ、明断を言ふて見、全體
 様は何者ぢや」と尋ねまする、彼の乞食がと思ふばかりの穢い服装の男は「私は兵士でいます、ハイ通

日から宮城内を準備して居た兵士ですが、逃げ後れて、未だに此の宮殿の中に潜んで居りますのですけれど
 も、最早今日に至りましては、食物が殆んど盡きて了つて、最う五六日も此儘に居ましたならば、餓死する
 者が澤山あります、萬望貴方日本人は、義侠心が深いと云ふ噂でありますから、お願い致します御助けを
 願ひます」と、両手を合せて頻りに拜み又頭を叩いて嘆願する様子、些しも偽りとは見えません、そこで通
 譯官は「爾か、それならば宜しい、隊長へ申上げて、何とかして遣らうが、宮殿内には凡そ何の位の兵員が
 居るか」左やうでいます、私などは一兵卒の事です、確とした事は存知ませんが、何でも五百名以上
 居るやうでいます」フム、大官は何と云ふ人が居る」そんな大官の人は居りません」婦人は居るか」婦
 人は居ません唯同治帝の后と、咸豐帝の后とが居らるゝと云ふ話しています、けれども私などは、顔
 舞した事がないから、確と居らるゝとは申上げられませんが、専ら爾云ふ噂でいます、萬望御慈悲御情に
 食物を戴かせて下さいませ」と、彼は包みず語りましたので、通譯官は直ちに之を小原聯隊長に報告しま
 す、聯隊長は急ぎ之を日本公使館内なる師團司令部に報告しました、山口師團長は此の報告を聞いて「フ
 ム、では婦人は居らんで、却つて兵員が五百も居る、それは意外ぢやなア、吾輩は又、支那婦人は足が小
 うて逃げられぬから、大方婦人が澤山に居るぢやあらうと思つて、容易に宮殿内に入る事は出来ぬと訓令した
 のぢやが、シテ見ると、婦人等は疾くに皆落ら行きたものと見える、それは遂に幸ひぢやつた」と言はれた
 ので、石橋參謀長も「左やうです、我々の想像とは全く反對でりました、併し未だ兵員が五百も残つて居

しました」と、粘鯨と歩みを進んで、東華門内に入り見ますれば、遙か向ふの庭の樹木の蔭に、人が見え
 ますので、大音に「何故早く出ぬか。日英兩國人は、先刻より東華門を開いて、貴様等の出て来るのを待つ
 て居る、早く出て来い、決して心配する事はない、躊躇して居ると、却つて貴様等の不爲であるぞ」と呼ば
 りましたので、彼は是を隊長に告げたと見えて、霎時して進み来り、川島通譯官に向ひ、恭しく禮を
 致しまして「寔に有難う存じます、唯今準備中ですので、最う暫らくの俟ちを願ひ上げます」と云ふから、
 川島通譯官は「貴様準備中だ云ふが、それぢやから昨日から命令して、今日出すと云ふて置いたのぢや、
 何故昨日の中に準備して置かぬ、又た別に準備も何も要るものでない、身體一個出ればそれで宜しい、速か
 に出でい、宮中の物などを假令塵芥一個でも持ち出すと免るぬぞ」「ソレそれは承知して居ります、決して宮
 中の物などは持ち出す様な事はありません、併し各自自分の物品は皆持つて行くですから、それは御許容
 を願ひたういたします、それに就きまして、皆空腹殆んど城へ入らんとするの有様ですから、それで躊躇し
 て、出て来るのも暇取れます、
 漸く晝些し前になりましたから、五六十名の支那兵は、勿論武装は殘らず解して居りますが、ソロ／＼と並
 んで出て参りましたから、小原大佐は「オイ川島通譯官、彼の中に重立ちたる奴が居るぢやらう、ソレ彼の
 先頭に立つて来る奴が隊長らしい、彼奴等二三名を此處へ連れて来て見い」と命じたので、川島浪速氏
 は、直ちに彼等の側に進み寄り、大聲に「止マナー」と號令して、彼等の行進を止め、其の先頭に立ちました

たる男に向ひ「お前が隊長か」と問ひますると「ハイ左やうでいいます、先頭に立ちましたる私共、三名が
 此の中の長官でいいます」と答へまするゆゑ「では貴様等三名だけ一寸此方へ来い、他の奴は皆並んで後
 命を待つて居れ」と言ひ渡しして、彼の三名の者を引連れ、小原隊長の許へ参りました、隊長は彼等
 の様子を見るに何れも四十歳前後にして、まア日本の軍人としたら、中隊長位を所らしいのでいいます、小原
 『お前は名を何と言ふて、何隊に属する軍人であるか、有の儘に白状しなさい』と斯の如くに通譯官をして問
 はしめると、彼は勿々沈着な男であつて、些しも憶する色なく満面に笑みを洩らしつゝ「私しは、榮祿
 閣下部下の將校でいいます、皇帝陛下が宮殿を御出發の際に、御守護申上げる心得で居りますと、何時
 の間にか我々の知らぬ間に、宮中を出させ玉ひましたゆゑ、唯臆氣に取られて、茫然自失して居ります中に
 貴君方外國人の爲に、宮城を取圍まれ、如何んとも詮方なくして、今日まで空しく籠つて居りましたとい
 ます」「ソレ宮中には、凡そ何程位の兵員が居るか』約五百ばかり居りますが、皆無暗に出たら殺されて了ひ
 はせぬかと疑ひ感ふて、斯の如く躊躇して居ります、吾々は日本御軍隊は、決して其様な苛酷の事はなさら
 ないと思ふ事を、萬々知つて居りますゆゑ、先に立つて出て参りましたが、中には頗る愛懼に堪へかねて居
 る者もいいます」「ソレ、爾だらう、吾々日本軍隊及び英軍は、決して其様な慘酷な事はしないに由つて、速か
 に皆出て来るやうに言ふて遣れ」と是から、其の通り言ふて遣りましたので、雖もソロ／＼出て参りまし
 たが、此奴等は皆勝手に立ち去りました、通譯官は尙ほ「それから宮中に宮女宮女等の幾つて居る者はな

いか『それはムいませぬ最うそれは疾くに落ち行きてしてムいませぬ』仄かに聞くに、同治帝威豊帝の后が宮中に残つて居らるゝ云ふ事であるが、全くか如何なる」と問ふ』と彼は何思ひけん俄かに下俯向いて、兩眼を閉ぢたる儘、何の言葉もムいませぬ。川島通譯官は『オイ何故、貴様は此の問ひに對して口を開かぬか、維新兩帝の后が在すにせいで日本人は決して無禮を加ふるやうな事はせぬ、必ずや相當な禮を以て之に待するから、有の儘に語れ』と言ふと、彼は顔て面を覆ひましたが其の兩の眼には涙が溢れて居りますから、川島君はさしてはと思ひながら重ねて『怎麼ぞや、兩后は善なく座するか』彼は此時漸くに涙を拂ひ『ハイ如何にも兩后は今朝まで宮中に在らせられましたか、今日宮城はいよいよ外國人に明渡すと決したる時、あゝ痛しくも兩后とも自ら刃に伏し玉ひました』と言ひも終らず、彼等は聲を惜まず泣き悲みます。嗚呼如何に國運衰頹の然らしむる所とは云へ、貴と御身にありながら、自ら刃に伏し玉とは、之を聞かたに實に悲みの極であります。

(三百十三)

此時に方つて、上諭は忽ち支那四百餘州に達せられました。此の上諭と云ふのが、日本國にては夢にたのみ見る事の出来な位の上諭であつて、誠に呆れたものでムいませぬ。曰く帝(咸豐帝)嘗に自ら妃を選ぶべし、滿人の處女にして十五歳乃至十八歳なる者、備し志願者たるを欲せば、速かに北京の宮闈に集るべし云々

々云ふ意味の上諭ですから、才氣煥發せる彼女は、之を見て慙然として猶豫致しませう、此の上諭に應じて選妃の志願者中に加はらんと欲しまして、具に此旨を家人に告げ、只管に上京の事を懇請致しました。が、家人は其の望みの餘りに身分不相應なるに憐いて、止むる者もわれは、冷笑して彼の女は氣が狂ふたらしなど云ふ者もムいませぬ、されども彼女は頑として動きませんゆゑ、家人は已むを得ず、之を承知しましたので彼女の喜びは一通りでありませぬ、旅裝匆匆に、廣東省を出發して、燕京の宮に向ひました。雖て北京に達して見ますと、三千の美人は、北京の宮闈に充滿しましたが、悉く是れ明眸娥眉、姿態曼娜として、其の艶は牡丹を欺き、其の嬌は海棠を壓するの美人でムいませぬ、殊に其日は、自家運命の分るゝ所ですから、各々其の姿姿を飾るに粉黛金銀を以てし、雪の皮膚を包むに異織綺錦を以て致しました。恰も是れ千株萬葉の名花一時に發して、香を放ち妍を競ふの光景でムいませぬ、然れども天質絶麗なる西太后の風姿に如く者は一人もありませんので、龍服は直ちに彼女の一身に凝注され遂に選まれて帝の妃となるを得たのでムいませぬが、若し是が普通の婦人であつたならば、氏なくして玉の輿に乗つたのですから、それこそ喜び狂ふて、忽ち驕氣を生じ、何の様な事を仕出すか知れませんが、そこは恰憚なる婦人でありませぬ、決して其様な事はありません、謙遜辭讓、務めて皇后の氣を撫りつゝ、陛下に侍しましたから、いよいよ叔慮に適ひましたが、其の二十歳になるに及んで、一男児を産みましたので、之を載淳と號けました。後に同治帝となりましたのは是でムいませぬ、されば帝の寵愛益々厚く、勢威皇后を凌ぐ位でムいませぬが、表面は務めて

愛嬌を以て人に對しましたから、皇后始り宮中にて、悪く言ふ者は一人もなく、諸人に敬愛を受けました。然るに此の婦人の産みたる載淳が立ちて皇太子となるに及びまして、詔により、爾來皇后と東后と稱し、此の御婦人を西后と稱する事になりました。それは皇后の室が、宮殿の東部に在つて、西后の室は其の西部に在りましたからさうです。サア此時までは、唯深宮の裡、詩賦管絃の聽にのみ侍したる西后は、爾來漸く嘴を政治上に容れるやうになつて来たが、婦人でこそあれ、學識と云ひ、才智と云ひ、各大臣も舌を捲いて驚く位でありましたから、自然に勢力は西后の身に集つて参りまして、其の得意思ふべしです。佛蘭人マザー・コルトレーが、西后全盛時代の風采を語つて云ふた

婀娜として優にやなせし其容、楚々として何となく雅なる其風、長閑にして輕風波を拂ひす、一池の春水鏡の如き所、右往左行する白鳥の清き美しき聲にも似たり、其卵の如き顔は多情らしき曠、霧縷の整ひたる雲形の生へ際とに圍まれ、其の純潔に隆起せる鼻は直く和らかなり、其の瞳は黒く輝きて萬斛の愛を湛へたり、彼女の總ての印象は眞に能く人の感情を惹き易からしむ云々

遂に西后全盛時代の容姿風彩が、眼に見えませうでムひます、咸豐帝が西后に向つて、寵愛淺からず、辛綿たる深情、徒らに春花の短きを惜みたるも、亦無理ならぬ事でもいふます。清國咸豐の十年に、清國政府は、嘗て歐洲列國と締結致しました天津條約交換を肯せなかつた爲め、平和談判茲に破れ、英佛聯合軍は太沽より上陸して攻め入り、破竹の勢を以て北進し來りましたので、清軍

遂に支へ難く、天津守を失ひ、張家灣亦敗れ、清朝の名將僧格林沁死守するも、衆寡敵し難く、通州も遂に敗れて、北京城内、馬蹄砂を蹴り、敵兵宮禁の中に入つて、圓明園は燐ひべし、炬焦土と化し、納涼園も亦兵火の爲に焼かれて了ひ、清廷の人々愕然色を失ひ、周章狼狽帝を擁して熱河へ遁れ走りました。時に西后は固より咸豐帝と一身同體でありますから、帝の赴く所は無論之に隨ふ事、影の形に相添ふが如くでムいしましたが、不幸なるは此の咸豐帝にして、熱河へ遁れ走つて、未だ此の紛亂の終局を結ばざる間に、空しく萬斛の怨みを抱いて、熱河の離宮に崩御して了ひました。西后の哀悼は如何ばかりでムいませう、併し悲みの中にも、又喜びのあるもので西后の産んだる太子載淳は七歳にして帝位に登りました、之を同治帝と稱します、之より咸豐帝の皇后を東太后と云ひ、西后を西太后と云ひますが、咸豐帝の弟たる恭親王と、東太后及び西太后とは、咸豐帝の御遺詔を受けて攝政と爲り、萬機を總覽し玉ふと共に、東太后西太后は幼帝の保育を兼ね司とる事になりましたが、此時より恭親王の威權は赫々として並ぶ者なきに至りました、それは何故かと云ふに、咸豐帝の實弟として、今帝の叔父として、朝廷の實權を掌握し、咸豐帝が熱河蒙塵の變に際しては、恭親王親ら英佛と和議を締結した位であつて、其の盡力は勿々一通りでありませぬ、且つ總理衙門を設置して、外政の府と爲すに及び、恭親王は其の首府大臣となりました、そこで自ら恭親王の權威赫々たるは道理でムいませぬが、西太后は是を見て、心竊かに妬み惡むの情を生じ、如何にかして恭親王の專權を弱めんと、種々心を苦しめましたが、遂に先帝の葬儀に重大の失典ありと云ふを口實として葬儀に關係

ある重なる者數名を酷刑に處して、そうして暗に恭親王を威嚇したのであります、斯の如くして恭親王を球の如く鞠の如くに翻弄致します、又同治四年には、遂に一旦恭親王を朝廷外に黜け、間もなく復た其の職に就かしめるなど、皆是西太后自分の威力の畏るべきを示して、以て親王の膽を挫き、親王をして自己に屈せしめんの策でまゝ、後に至りまして、恭親王が稍首を擡げかゝつて来て、西太后の勢力を侵蝕せんと致しましたが、西太后は早く之を察し、断然恭親王を退けて、醇親王をして之に代らしめ、朝廷に立たせました、此の醇親王は、文雅風流の人にして、志行共に恭親王の如くに行きません、逆も經世の實務に堪へられない人ですから、そこで、西太后は彼の有名な李鴻章の才幹に依頼して、之を補はしたのであります、西太后の専制は、概ね斯の如くであります、けれども之に伴ふ隨機之才、應變の智は又驚くべき程であつて、西太后が重難の政を臨むの時に方りまして、長髮賊の亂を始めとして、國難叠々として清朝の危き事累卵の如くでありましたが、西太后は能く會國藩劉錦堂左宗棠李鴻章張之洞等の俊傑を用ゐて兎に角國家の安寧を保ち得ましたのは、又た世に稀なる女傑であります

西太后のふ腹から出でたる同治帝は、不幸にも同治十四年に痘瘡に罹り、卒に崩じ玉ひました西太后は悲哀に沈んで、暫時は人界の常なきを歎じ、偏へに浮世の夢の如くなるを感じましたが、野心はいつしか此の悲みを消して、更らに西太后をして其の手腕を揮はしむるに至りました、それは何故であるか云ふに、皇位繼承問題でまゝ、若し正當の順序より言ひましたならば、當時崩じ玉ひたる同治帝の皇后は、已に懷

妊されて居らるゝから、其の分身するを待ち、生兒男子なれば、之を帝位に登せて、皇后が攝政の任に當るべく、若し女子なれば、尙ほ他の近親を册立して、同じく皇后の攝政に待つべきであります、爾すれば西太后は忽ち權力を失つて、復た以前の如き威勢を振ふ事が出来なくなるは明かです、故に、西太后は一生の運命を賭けて、必死の争ひを致し、以て之を阻まんとしたので、遂に未曾有の大紛擾を惹き起すに至りましたが、調べて見ますに、咸豐帝の父君なる道光帝に七人の男子があらまして、其の長男は夭死し、第二第三は女子、第四が咸豐帝でまゝ、今其關係ある皇族の系統を記しますれば左の如くであります

子長
三女
天
光四 咸豐帝 東太后 同治帝
帝五 醇親王 端郡王 博儀(前の太子)
醇親王(紀西太后妹) 今上帝(無子)

斯くの如くでありますから、同治皇后の分身若し女なる時は同治帝の父君たる、咸豐帝の直弟醇親王最も近親であるから、位に登るべきであるが、醇親王は此時既に死したるを以て其子端郡王が天子となるに至當である、然るに端郡王は已に壯年に達して居りますので、立て、皇帝とすれば西太后は逆も自分の威力を逞ふ事は出来ません、故に獨斷を以て、當時尙ほ幼冲なりし醇親王の子を立て、皇帝の位に登せました、之を今上帝即ち光緒皇帝と致します、諸皇族は嗚然として愕れて居ります、同治帝の皇后は

憤りに堪へ兼ねて、とうとう自殺してしまいました。忠直なる一儒臣は、西太后の非道を諫め争つて自害致しました。されども西太后は毫も之を意に介せず、依然として攝政の地位に在り、依然として實權を握つて居りました。其の配偶なる咸豐帝崩御の後には、獨り宮殿の中に逍遙して、空しく鶯鶯を秋水に羨み居るの有り様ゆゑ、之れ多情なる西太后の久しく耐ゆる所でありませぬ。時に李蓮英と云ふ者がありまして、年正に二十歳、又双びなき美男子でありませぬから、西太后深く之を愛し、遂に彼に與ふるに大監の職を以てするに至りました。北京人の云ふ所に由れば、西太后に隠し子ありて、即ち此の李蓮英の子であると申して居ります。何しろ一時は後宮春深處、銀燭燈々、管絃亂舞、以て長夜の宴を張り、便儀前後に侍坐し、嬖人左右に充満すと云ふ様な有様にして實に驕奢に耽りましたから、心ある人々は、昔肩を纏めて居りましたが、併し西太后も漸々老いて參りましたので、光緒二十年に至りまして極めて盛大なる六十萬壽節式を自ら舉行し、茲に首尾能く太政を皇帝に返與するに至りました。茲で一寸矢野公使の事を申し上げますが、同公使が北京駐紮中清帝に謁見した際、清帝は矢野公使に向つて、萬望日本と清國と力を協せて、東洋の國勢を挽回したいと云ふやうなる意味の語を演べられたので、矢野公使は、茲で一番清帝を十分に説いてやらうと思ひました。席を進み、已に口を開かんと致した時、西太后は何思つたか、慶親王を呼ばれまし「日本公使に爾ら云はれよ、此處は宮中なるゆる外交上の事を談すべき所にあらず、外交上の事は、宜しく總理衙門に於て談すべしと、斯の如く申すべし」と言はれたので、慶親王は、矢野公使に向つて、其の通りに傳へ

ました。公使は仕方がないから、口を噛み、苦笑しつゝ皇帝の方を見ますと、帝は赤面して下俯向ひた儘黙して居られたさうでいます。總て公使は喉をきよめて宮中を出てしまつたが、隨行の守田大尉に向つて「イヤ怎麼も、仕様のない遊さんやなア、彼の姿さんが死ななくては不可んわい」と言つて、大いに笑つた。云ふ事でいいます、此の一事を以て見ると、西太后の權力は頗る強大にして、帝の親政と云ふは名のみ實權は依然として西太后にあつた事が明かされています。其他西太后と清帝の間に於ける話には、種々ありますけれども、餘り長くなるので略して置きますが、清帝は全く開明主義であらせられますから、廣東省の後傑康有爲と云ふ人を用ひ、其他の人才を抜擢して、國政を改革せんと致しましたが、康有爲等は、先づ西太后を押込めて了ひ西太后一派の頑固黨を誅劊して了はなければ、逆も大改革は行へないと見ましたから、帝に之を諫りました。帝も大義親を滅するの英斷を揮はんと、いよく決心致しましたが、其の策は頗る面白かつたのです。先づ康有爲等は、袁世凱と謀り、天津觀兵式の日、帝は直ちに袁世凱の陣營に投じ、袁世凱をして義軍の隊長たらしめて、檄を天下に飛ばし、大義を國中に唱へて、旌旗堂々北京に攻入り、先づ西太后の一派を誅劊して、西太后を離宮に幽閉し、而して一大改革を圖らんと企てたのでいます。此の計畫にして若し成就したならば、清國は疾くに文明の進歩を見たに違ひないのであるが、惜いかな、此の奇策は破れて了つたのであります。何で破れたかと云ふと、袁世凱が俄かに反覆して、夜中暗かに北京に入り、先づ榮祿に面會して、此の陰謀を密告したから堪りませぬ、榮祿は直ぐに之を西太后に密奏しますと、機先

を制するに最も巧みなる西太后は、即時榮祿と謀つて、幾多の改革黨を一網の下に打ち被せて了ひました。張蔭桓は之に組みして遠誦の刑に處せられ、譚嗣同、楊鏡、劉光弟、林旭等七名の年少志士は、千秋の恨みを吞んで空しく刑場の露を消へ、皇帝陛下は痛はしくも太液池中なる瀛臺に幽閉の身となつて了ひました。康有爲は運好く逃れて、一時日本國へ渡りましたから、一命は助かりましたが、之を清國の政變事件と云つて、當時有名な事變でいふました。そこで西太后は、皇太子傅備を擯して、再び垂簾の政を爲すに至りましたが、此の皇太子傅備と云ふのは、皇帝の子ではなく、端祥王の子でいふます。何故に此の端祥王の子を以て皇太子に爲したるか云ふに、前にも一寸演べて置きました如く、端祥王は道光帝の第四子、溥儀王の子であつて、當に帝位に登るべき身であつたのに、西太后に妨げられ、遂に位を踐む事が出来なかつたので、是を至極遺憾に思ひ、如何にもして實權を握り、一たび其の宿志を達せんと熱中し、巧みに西太后を籠絡して、遂に其子傅備を立てさせたのでいふます。

又た西太后の博學なる事は、誰しも聞き知る所でありますが、併し其の讀んで居る書は、皆支那の書であつて、洋書は些し讀まないとの事です尤も洋書を觀て、歐米の事情に精通して居たら慈云ふ事變を起すやうな事はありませぬが、何しろ漢籍のみを博く涉獵して居て、就中歴史に精通して居らるゝやうでいふます特に驚く可きは、手跡の見事なものであつて、萬壽山に行つて見ると、萬壽と云ふ二字を大きく書かれて額に掲げてありますが、其の筆勢は、實に雲舞以龍躍るの如くあつて、怎麼しても婦人の手跡とは思へませぬ。殊

に萬の字は右の手で書き、壽の字は左の手にて書かれたと云ふ事でもいふますから、之を以て見るも、西太后が如何に多能多技であるか云ふ事を知るに足りませぬ、或人が曰ふに、西太后は唐の則天武后に好く似て居るとの事ですが、成程其の爲す所、行ふ事、武后に酷だ似寄つた所があります。就中其の慘行暴狀の甚たく脅寄つたものあるは、武后が獵りに高宗の選立したる太子忠を廢して、其子賢を立て、又た忽ち之を廢し、其の次子哲を立て、又之を廢し、甚しきに至つては、其子弘を一たび太子と爲したるに、自分の意に倅ひたりと云つて、直ちに之に鳩毒を吞ましめるなど、實に慘暴至らざるなきは、恰と西太后が、東太后を毒殺したり、同治皇后を死に至らしめたり獨斷を以て光緒帝を擁立したりなどしたるは好く相似て居ります。此の東太后を毒殺したと云ふ事は、北京人中に傳はつて居る説にして、殆んど不文の口碑と云つても宜しい位です。傳へ云ふに、咸豐帝の將に崩せんとしたる時、東太后に詔を遣して云ふに「朕の後嗣子(同治帝にして西太后の腹より出す)幼冲なれば、群臣母后の(西太后)輔佐なくてはならぬ、汝は朕の正后、自ら正に朝に臨むべし、西妃(西太后)は人を爲り端正ならず、汝憤んで西妃の爲に欺かるゝ勿れ、又た其に朝に臨む勿れ」と、斯の如く遺詔せられたるは、流石に咸豐帝も人を觀るの明がないでは有りませぬ、偕同治帝の立つに及んで、群臣は東太后に請ふて、政務に與らしめましたるに、西太后は偏へに意を曲げて、東太后に接し、大いに其の歡心を買いますので、東太后大いに喜んで、萬事西太后と相談して行ひましたが、或日兩后は閑談の際、東太后の曰ふに「人を知る事の難いのは、古より歎する所であるが、先帝の明でさえに

尙御身を知る事が出来なかつたのである。西太后は眉を翹めまして「何故に左やう言はれまするか」と問ふと、東太后は笑ひながら、懷中を探つて取り出したのが、彼の先帝の御遺詔でありませう。遺の西太后も一見愕然として色を變じます。東太后は頻りに慰め諭して云ふに「御身と吾とは姉妹である、心に些しも隔てなければ、憂ふるに及ばぬ、此の詔は斯の如くして「はん」と、直ちに之を火中に投じて焼棄して了ひました。西太后涙を流して喜びましたが、其後西太后は、東太后に茶菓を献する時、其の中へ毒を入れて、とうとう東太后を毒殺して了つたさうで、此等の詔は、北京人士の一部の人達の中に傳はつて居る證據であつて、果して事實なるや否哉は知りませぬ。

(二百十三)

西太后には、順和園より宮城に回り給ひて後は、西苑なる儀鸞殿を常御所として、朝政を聽かれましたが、今回の變事の起りまして後、間もなく紫禁城内の寧壽宮に移らせられ、皇帝をも同じく瀛臺の幽居を出でて、寧壽宮中に同居せしめ玉ひました。皇帝は聯合軍の北京に近附いて参りまして、事態甚だ容身ならざる時、幾度か西太后に請ふて、速かに媾和の策を取らん事を以てし、又た此儘に推し行きなば、社稷の滅亡する眼前にあるゆゑ、寧ろ躬ら身を外國公使館に投じ、以て中外の紛争を罷めしめんとす言ひ給ひました。西太后が中々聽き容れ給ひませぬで、萬一の時は西安府に逃れんと、暗に其の準備をして居られたので

す。故に八月初日、北倉既に聯合軍の爲に占領され、綏祿も南樂村に自殺し、李秉衡も亦死せりと云ふ報告を聞き玉ひたる時、西太后は端祥王と榮祿とを召して「此上は速かに西安府に赴かん」と仰せられましたが、端祥王榮祿等は、西後の車駕一たび宮城を出でなば、北京の人心騒ぎ立ちて、防守の策は逆も施し難しと思ひしと見え、何事も明白には奏聞せず、曖昧なる事を言つて、強て之を引き留めて置いたのであります。八月十三日の夜に至りましては、最早や砲聲銃聲相和して聞こへますゆゑ、逆も隠す事は出来ませぬし、十四日の朝には宮中の庭へ小銃砲が飛び來りますので、西太后も皇帝も、いよいよ北京出發と確く決心致しました。此日王文韶と云ふ人は、宮城中に入つて、西太后と皇帝とに五度拜謁したさうで、いよいよ、其時兩陛下の側面在る人々は、僅々三人だつたとの事です。西太后は王文韶に向つて「遂に頼み甲斐なき人心である、日頃は五月蠅きまでに參内して語り媚ぶる人々も、今日は吾々親子の側に在る者さきに、僅か三人に過ぎず、他の人々は、皆吾々二人を棄て、自邸に歸れり、嗚呼世に眞の忠義なる人と云ふは斯も無きものか」と仰せられて、道に蒙遮なる女傑も、殆んど御涙に暮れんばかりにて居玉ふ、其の有様を見ては、王文韶も御痛はしく思ひまして、兩陛下の御心中を察し參らせ、暫時は涙に咽んで居りましたが、漸くして氣を取直し「陛下の御詞、寔に御理にはふりませぬとも、眞忠義の人々とてなきにあらねど、奈何んせん今の場合敵を防ぐに忙はしくして、陛下の御側にさへ參上する暇もなきものと見えます。さりながら、端祥王始め榮祿剛毅等、必ず今にも參内仕り、御遷行の御供奉るに相違なきゆゑ、御安慮めらせられますやう

に」と奏聞したるに、皇帝は「朕は太后と共に、明早朝に宮中を出るの決心である。此處に居る三人は言ふまでもなく、皆供に行くのであるが、其方も是非供に行かれよ」と仰せられますから、王文韶は「陛下が微臣を斯まで思召し賜はる御教慮の程、臣が身に取り如何ばかりか辱く存じ奉りまする、微臣兩陛下に附添ひ奉りたくは思ひまするが、奈何んせん、寄る年波にたつ足さへ思ふに任せぬ老の身の上、如しや老軀の随ひし爲め、却つて陛下の教慮を慫慂し奉るやうなる事にてありたる時は、寔に以て恐入りたる次第と、唯そののみが心懸りにふりまする」と申上れば、陛下は「いやとよ左やうな心配に及ばぬ、是非供に來れ、尤も斯る騷擾の中ゆゑ、車とても思ふやうにあるまじけれども、若しなかりしならば後よりにても來たれ」と仰せられました、そこで王文韶は、夜半些し前まで居りましたが、別段何の話しもなく、一度我が邸に歸りまして、又た夜明方に（八月十五日）參内して見ますると、最早兩陛下とも宮中を出でさせ玉ひたりとの事ですから、王文韶は大いに驚き、我等一度邸に歸りたるが過ちなり、さうながら、未だ遠くは落らぬせ玉ふまじ、いで後を追ひ參らせん、老人なれども忠義一徹の王文韶ですから、急ぎ出で、得勝門の方を指して歩みを進ばせました得勝門と安定門との半まで參りました時は、道の王文韶も餘程身體疲れました暫らく立止まり「ア、年老つた、十年前は道の二十里や三十里（支那里數）歩みたりとて、疲れと云ふ事は覺えなかつたが、最ら、是等は逆も西安府まで供は出來んわい、イヤ、イヤ、そんな事では不可ん、老いて益々壯なることを大丈夫、假令途中に斃るゝまでも、御供は致さるにやならぬ」と氣を取り直して進

んど致しましたが、如何に氣のみは逸ると雖も、七十近き老の躬の、足の疲れを奈何んせん、向ふに見ゆる靈鷲庵、彼の寺に入つて一休みせんものと、寺中に入つて取次を乞ふと、一人の僧が出て來りまして「何御用」と尋ねますゆゑ「吾等は王文韶と云ふ者であるが、住職に御目に懸りた」と云ひますと、彼の僧は俄かに禮を厚ふ致しまして「然らば尊官が王文韶をまで人いしますか、住職は不在でありますが、王文韶さまでありますならば、兎に角先づ上りを願ひ上げます」と大層鄭重なる扱ひとなりました、文韶は疲れたるゆゑ一寸休息させて貰ひたき由を申しますると「サア萬望此方へ」と先に立ちて案内し、奥なる奇麗な一室に連れ行きまして、茶菓を出して云ふに「何しろ、此の通りの大騒ぎにて、外國の兵等が屢々入り來つては、動もすると、亂暴を働かんと致します様な有様ゆゑ、御靈應も出來ません」而「イヤ、何處致して、斯る混雜の中に、厄介を蒐けて寔に濟まぬ事である」と言つてる中に、俄かに物音騒がしくなつて參りましたから何事ならんと思ふ中に「ヤア大變大變、外國兵が火を放ける、寺を焼く寺を焼く」と、多くの僧徒等は上を下へと騒ぎ出しました、最前より王文韶と語して居たる僧徒は「御身分のある尊官が此處にお在遊ばして、萬一外國兵等の爲に虐待でもされましますと不可せせんから、何れへか安全の所へ一時も逃げなされた方が宜しからんと存じます」と、最と信切に言ひますゆゑ王文韶も其の厚意を喜び「然らば何れへか安全の所に逃げん」と、眼を告げて此處を立出で、韓と云ふ人の邸に到りましたるに、此の韓は王文韶に恩を受けたる人にて、昨日より文韶の身の上を頻りに心配して居たので、そこへ文韶が行きましたから、其

の喜びは一通りでいけません、暫らく此家に在つて休息して居りますと、此時安定門や得勝門の城壁上に、外國兵(多分日本兵ならん)が澤山居て、其他街道の所々にも、諸外國の兵は混合して、支那の敗兵を狙撃し、銃聲の盛んなる事驚くばかりであります、其中に午後になりますと、西直門が開いて居ると云ふ事が知れましたので、そこで王文韶は、然らば西直門より出で、兩陛下の御後を慕ひ参らせんと思ひ立ち、衣類と金とのみ用意して、韓の家を出んと致します、俄かに雨が降つて来て、其の雨の大降りなる事恐ろしい程ですから、人々の止めるに従つて一時出發を見合せました

王文韶は、大雨の爲に一時出發を見合せますと、其中に城内の銃聲も次第に衰へて参りましたし、雨も漸くに止まりましたが、治安門の外が焼け出して、勿々の騒ぎでいいますから、此日(十五日)は遂に出立行く云と噂ですから、王文韶も、それでは吾等も西直門から出で、兩陛下の御後を追ひ参らせんと言ひますと、韓と云ふ人は之を止めまして「貴君は最早や七十に近い身で、如何に陛下に仕へ奉る爲とは云へ是から西安府までは數千里險惡の道、それを歩出で遊ばして、若し萬一にも途中にて、闕らざる災難にお罹りなりましたら、悔いても詮なき御身の大事、貴君も一人位のお供ならすとも、供奉の人々は必ず多くいませうから、貴君には止まり遊ばして、其中に諸外國との談判へ入れば、陛下は御還都遊ばすに極まつて居りませうゆゑ」と、種々に諫めましたが、王文韶は勿々以て此の諫めを聞き入れません、そこで

韓は「是程までに申上げて、お聞き入れなく、強て立ち出になるならば、致し方がありませんから、最早や止めは仕りませぬゆゑ、それでは馬車に乗つて出遊ばす様」と言つて、自分の乗る馬車を、文韶に與へました、王文韶の喜び一方ならず「前の厚意信切は忘れぬ」と云つて、此の馬車に乗じて、韓の家を立ち出でましたが、道を急いで七八丁も参りますと、途中は支那兵の北へ行ける者や、之を追ふ外國兵にて、其の混雜は一通りでいけません、王文韶は其の混雜の中を滑り滑り行きますと、右手の横道より出で來つた露國兵三十名ばかり、王文韶の乗つたる馬車を見や、何やらガヤ／＼言ひながら、文韶が行く先手の道中に立ち塞がつて通行させません、文韶は車上より聲和らかに「吾等は見らるゝ如き老人ゆゑ、萬望憐れと思つて通して下され、私は貴君等外國の軍人に對して決して抵抗する者ではなからぬ」と言つたが、彼等は勿々聞き入れませぬ、二三の露兵は突如飛び蒐つて文韶を引き溜り下し、馬車を奪ひ取つて立ち去つて了りました、王文韶は其の暴行を憤ると雖も、如何とも致し方がいませぬから、嗚呼憐むべきは戰敗國の人である、獨り歎息しながら歩行して進みます事五六丁、ヌルト此時後脊の方から馬車を馳せて來る者がありまするが、文韶は回顧へて見ながら此人も多分吾等と同じく、住み慣れたる都を落ち行く人であろう何人が知らぬが、吾等に比すれば馬車のあるだけ、また幸ひであると思ひながら、其の人の進み來るを道路に立つて見て居る中に、間もなく馬車は近附いて参りましたが、車上の人は王文韶を見るより、慌たしく「ヤ、父上ではありませぬか」と言はれて、文韶も驚きながら見れば、こは如何に、現在自分の次子でい

まず「ヤア其方は文恭」に父上能くま御無事で」と、思はず馬車より飛び下り、馳せ寄つて親子互に相抱き、尋時が問はせ惜まざる歎きまじしが、稍々あつて氣を取り直し「親子斯く無事で面會したのは、不幸中の僥倖であるから、今歎き悲んで居る場合でない、サア是から直ちに兩陛下の御後を追ひ参らせん」と、次子は又文韶を扶けて、馬車に乘らしめ、自分は前の方へ相乗りして、次子自ら策を取つて馬を進ませます。文韶は其の次に追ひましたので、親子の喜びは一通りでいけません、其の長子は、多分既に陛下に供奉したるに違ひなしと、是から馬車を驅つて進まんと致しする所へ、又もやとどかどか現はれ出でたる外國兵等、矢庭に此の馬車を目標けて襲ひ來り、とうとう是をも奪ひ取つて了ひました、茲に及んで、二人は復も馬車なき身となり、止むを得ずして歩行となりましたが、其中に追々兩陛下の御後を慕ひ参らする人々集まり來つて、七八人の人數となりましたので、互に些しは氣力を増し、勵まし合つて進みましたが、海甸と云ふ所へ來ました時は、諸人皆空腹となつて致し方がいけません、食事を爲さんものと、飯屋を尋ねました、が、何しろ此邊の土人は、諸外國兵の追撃し來ると云ふ噂が高いので、皆逃げて了つて、悉く空家同様になつて居りますから、人影さへも見えないやうな有様にて、進も食事を爲す事は出来ません、止むを得ず、畑中の唐蜀黍が、今熟しかけて居るのを取つて、之を焼き、食しつゝ進みまして、遂に其日は眞石と云ふ所まで來て宿泊を致しましたが、是とも唯嚙を幾々に止まつて、空家同様の家へ寢たのでいけません、其の翌日は日本里數で六里ばかりも歩行しまして、居庸關と云ふ所に来り、此處に宿泊を致しましたが、其の又翌日

は、懷來縣と云ふ所まで進みますると、此處にて漸く兩陛下に拜謁する事を得ました、此時の王文韶親子の喜びは何に喩へんやうもいけません、又兩陛下の御姿を見奉れば、實に腹を寸断せらるゝの思ひが致します、當時西太后の御衣は如何んと云ふと、藍色の夏衫を着せられ、頭髪も梳らず、皇帝は黒紗の長衫と黒布の靴襪を召させられ、寢具行李なども携帶せず、北京を立ち出で玉ひて三日間は、均しく火坑の上に睡らせ玉ひて、被もなく褥もなく、着替の御衣服もなく、亦破々飯も喫し玉はず、僅かに粥を啜りて體を溲がせられたる如き悲惨なる御有様でいしましたが、此の懷來縣に着し玉ひて、始めて縣令から御輿を献上したのでいします、又其他の地方官からも種々なる物を献じて、漸く幾分か不自由を防ぐに至りました、殊に兩陛下の落ちさせ玉ふ前に、清國の敗兵等が、此の道を日々續々と通過しましたが、彼等は沿道の民家に入つて掠奪を恣にし、亂暴狼藉至らざるなく、爲に人民は皆逃げて了ひ、物資は皆掠奪され、家は多く焼かれ居て、何も無い野原山道を落ち行き玉ふやうな有様ですから其の御困難は實に言語筆紙には逆も演じ盡せるものではいけません、昔しから支那には天子の蒙塵した事が屢々あります、此の光緒皇帝の蒙塵位に困難せられたのはあるまいと云ふ支那官吏の語だうでいします、それで此時、陛下に従ふたる人々は、皇族にては端祥王、慶親王、肅親王、那王、倫貝子、懋貝子等のお人々であつて、高官にては剛毅、趙舒翹、吳廷芳、王文韶親子、溥興等であり、各部院司員共に二人、滿小軍機二人、漢小軍機一人、神機雲神營八旗練軍約一千餘人、馬玉昆鑾輿を保障しましたが、兵士等は食物の不足より、不平を鳴らして、途中か

ら逃亡する者頗る多く、一定の儀仗兵なるものなく、實に憐れなる有様でふします、見る人皆、是が四百餘
 洲に君臨し玉ふ皇帝陛下の御通過か、さても痛はしき事なりと涙を流るぬ人はふいません
 兩宮は懷來縣に滞在せらるゝ事三日、十九日に至りまして此處を御出發になり、往く事五十清里にして、河
 城と云ふ所に御一泊あり、翌二十日には、又往く事四十清里、鷓鴣驛に一泊、二十一日には往く事又た六十
 清里、宣化府に着せられました、此處に又もや三日間休息せられました、此の附近は、北京天津の近邊と
 違ひ、山道になりすから、勿々道路が抄々しく参りませんが、廿五日に此處を出發して、道を急がれまし
 た、其の途中の御困難と云ふものは、容易に演へ盡せません、壽永平家没落の當時も斯やと想見せしむるの
 でふします、漸くにして支那の八月十七日に「日本の九月」太原府に到着せられました、糧食の困難は益
 々甚だしくなりましたので、茲にいよいよ「微餉の上諭を發する事になりました、メシと流石に皇帝より勅諭
 の下りし事とて、清江轉運局總辦觀察は、各省の銀米を集めて行在所に轉送せんと、先づ江東省巡撫德壽に
 向け、同地に在る藩運二庫より、銀米十五萬兩を清江に送らしめ、尙ほ湖北安徽兩省よりも京餉を納付せし
 め、其の額八十萬兩に達しましたから、該局の會辦游戒德甫に命じて、之を太原府に輸送せしめました
 引續き各府より納付すべき餉金は、觀察自ら之を携へて太原府に赴く事になりました、德云ふ有様ゆゑ、此
 の太原府に到つて、漸く不自由のなきやうになつたのでふしますが、西太后も此の艱苦に遇ひ、且つ列強聯
 合軍の勢ひを見て、始めて悚然として苦心されたのでふします、そこで此の太原府に着するや、皇帝をして

微梅の上諭を發せしめました、其の上諭の概要は
 一、團匪暴亂は北京政府の關する所にあらす
 二、端祥王及び其他の元兇は今邊かに處罰する能はざるも如今重く用ゐざるべし
 三、陸及び西太后共に健康なり庶民須らく放心すべし
 四、海陸軍備を革新し以て邊境を堅守すべし
 五、國民は常に臥薪嘗膽他日報効を期すべし
 先づ斯の如き意味の上諭を下したのであります、爾も時已に運かつたのでふいまして、西太后は再び帝
 輦を擁して、此の太原府を跡になし、古の帝都たる西安府を指して落し行かれたのでふいします、何が爲に、
 斯の如く遠方まで移らるゝかと云は、太原府は聯合軍が襲ひ來らんかどの恐れあるからであります、聯合
 軍は北京陥落の後に於て、團匪の巢窟たる保定府に突進して、何の苦もなく之を乗取り、獨逸兵の如きは、
 更に短刀直入急に太原府を侵さんとするの模様が見えますので、茲に於て尙ほ脚を遷すの議は西太后より提
 出され、皇帝之を嘉納し玉ひて、龍駕香々遙かに西安府を指して移らるゝのでふいします、俄西安府へ到着
 して後は、兩陛下は知府衙門即ち日本で言つたら縣廳とも云ふべき所を以て、行宮と定めましたさうで、行
 宮の護衛兵としては、甘肅軍の大隊を以て之に當てましたが、此の大隊は董福祥腹心の徒黨に由つて組織せ
 られたるものでありまして、董の命する所は水火と雖も尙且つ之を辭せざるほどの暴虎馮河の徒でふします

それで董福祥も、亦自ら本部を行宮に密接したる高等官の邸内に置き萬事を監視しつゝあるので、以上演ふる如き有様ですから、現在の宮中が、總て董の徒黨を以て滿されたりと云つても宜しい位であります。此徒は宮中の事々物々々、見聞する所に從つて之を董に報じます。或日の事皇帝西太后と王文韶に今一人の滿洲高官とが極めて内密に、今回の危機列強の元兇處罰要求及び北京還幸の事を語りつゝ居りました。が、此時他に居たる人としては、西太后の信任する宦官二名のみで、いよいよ、慍慍して之が董福祥に知れました。このやうに、董は憤然として行宮に來り、皇帝と西太后との居玉ふ所に入り來つて、卒爾として叩頭の禮を施しましたが、聽て西太后に問ふて云ふに「聞く所に依れば、太后には列國の請求を容れられ、忠實なる端祥王及び忠義無類の大員等を、元兇と稱して處刑なさんとし玉ふ御内議ありと承はりますか、果して其様なる事のみならず、一應御親ひ申上げます」と言ふ様子、如何にも無禮極まつて居て、彼は問者をして密かに宮中の様子を探らせつゝある事を蔽ひ隠さんとせず、却つて公然と之を口にせんばかりの有様で、いよいよ、彼の態度は、其の北京に居りました時に比すると、天地霄壤の違ひで、いよいよ、西太后は董福祥の言を聞き眉を擧げて、聊か驚愕せる如くでありましたが、聽て徐かに答へを言ふに、「否、卿よ、未だ何等の決定する所はならず、恐らくは卿に於て問題を決定するに好き方便を有するならば、斯の如く云はれましたが、西太后は董福祥の無禮なる舉動には、餘程怒らせられたる如くで、いよいよ、居合せたる人々も、皆暫らく沈黙して、一言も吐く者はありません。董福祥は總て皇帝に向ひ「小臣は

陛下に向つて武人の粗暴直言を寛恕せられん事を願ふ者であります。小臣が敢て太后に對して問を發したるは、全く朝廷に忠を盡さんとするの微衷より出でたのであつて、陛下は漢朝の末に、王莽なる者ありし事を御記憶せられませう、彼は素と粗暴無智の武人でありましたが、然も能く漢帝をして、外狄に對し恥づべき條約を結ばしめなかつたで、いよいよ、斯の如く言放つて足音荒々しく立ち去りましたが、實に彼は不埒極りたる男であります。彼が例に準けたる王莽は、後年帝位を篡奪したる亂臣であります。若し平常に於て、彼が如き言を發すれば、彼は必ずや死刑に處せられたに違ひないので、いよいよ、親衛兵は直ちに來つて、彼を陛下に引下し、誅戮を加へずには居ませんのに、然も時事の非なる、誰か皇室の爲に彼に誅を加ふる事の出来ませうや、滿座唯手を擧げて、彼の暴言を聽き居たるのみとは、實に憐いべきの至りで、いよいよ、彼は己に威權を掌握して、欲する所行はれるなきの決意を示して居ります。されば王文韶の如き、忠直なる人々は、皆泣いて兩陛下の御不幸を氣の毒に思ひ、種々に之を救ひ奉るの策を講ずると雖も、如何んとも致し方がありません。是から尙ほ委しく演じましたならば、いろ／＼な話もありますが、餘り長くなること不可せんから、兩陛下の事は、先づ茲に止め置きて、次回から北京の皇城を、聯合軍が通過したる状況を演べ、それから兩皇還幸の所にて日本之旗風の局を結び更に題を變へて面白き事實講談を演ずる事と致しませう。

是からいふ、皇城の通過は、最も華やかな話になりませんが、それには一寸後戻りをしなくてはなりませんから、其の思召して御覽を願ひ上げますが、是より前、未だ宮殿中に居る清兵を出さない頭、即ち北京城の占領されて間もない時分でありましたが、各國指揮官が集まつて種々の事を議せられたる時、露國司令官のリュウニエツチ中將が、發言して言ふに「サテ諸君、我々はまア無事に北京に達する事を得て、何より幸ひでありましたが、それに就て、未だ此の宮城の中へ這入つた者は一人もないけれども、我々は、一ツは我々が清帝國の首都たる北京城を乗取つて、其の城壁上に國旗を掲げたと云ふ紀念の爲め、一番此の宮殿中を通過しようではありませんか、小官は是非とも一ツ宮殿中を通つて見たいと思ふが如何でせう」と言はれました、ヌルと未だ誰しも言を發する者の中に佛國の司令官スレー少將は莞爾と笑みを合んで起立し「如何にも露國司令官の御發言は、御有理と考へます、諸君は速かに可決して、是非紀念の爲に皇城の中を通過したいものであります」と言ひました、露國司令官リュウニエツチ中將は、又た言ふに「是非一ツは紀念の爲め、又一ツは清國朝廷を懲しめる爲にも、是非行りたいのです、今更言ふまでもないですが、各國公使の此の帝都に在る者を應殺せんとしたるのみならず、婦女子までも殺せんとした、此の非道、此の不義は、大いに一ツ懲しめなくてはならぬは勿論です、それに就て將來を大いに懲しめる爲にもなりますか

ら、是非皇城中を通過してやりたいです」と演説を立てましたが、是は實に道理な言でありますから、誰一人として反對する者のないのみならず、皆舉つて大賛成を致しました、そこで皇城を通過すると云ふ事は豫め決したのでありますが、併し容易に實行しなかつたのであります、何故ならば、此の皇城の通過と云ふ事が、口實は如何にも立派であつて、イヤ北京占領の紀念の爲めとか、又たは支那の將來を懲しめる爲めとか一寸聞くと誠に立派な言草であるが、退き退き考へて見ると、決して漫然とは實行が出来ないので、故に我が福島少將は、此の皇城通過の議の豫め決しかつた時、反對は出来ななし、又反對しても其の議論の容れられる筈がなから、唯一言賛成ですと云ふ事だけは演べたが餘り大賛成はしなかつたし、又た之を急速に行らうと云ふ事は無論言はなかつたのです、それで此の議の可決せらるゝや、大急ぎにて我が公使館に還り、山口中將に向つて、其の概要を報告したる上「怎麼も師團長、之は容易に實行すべからざる事と思ふです、尤も露佛の司令官も、急速に行らうと云ふ事は言はまかつたですから、小官も唯賛成だけはいしたけれども、熟々考へて見ますと、漫然實行すると、如何なる事に成り行くやも圖り難いと想はれるです」と申されましたので、師團長も「爾がやねい」と言つて、暫らくは頭を傾けて考へて居られました、稍あつて、成程是は君の言ふ如く、漫然實行は出来ん、出来んが、併し爾かと云ふて反對する口實がなし、怎麼も困るやねい「少將熟々考へて見ますと、成程皇城通過の口實名義は如何にも立派であつて、誰に聞かしても、必ず悪いと言ふ者はないし、又た後世に傳へて名譽でありますから、併し是れ又た他の一方から

思ふて見ますと、今宮城の門々は我が日本軍が北と東西の三門を占領守備して居て、米國軍が他の一門即ち南門を占領守備して居るのみで、他の露佛の如きは、一も占領して居らんです、そこで照く考へて見るに、露國が一ツは羨望しめるの餘り、皇城の通過を口實にして、自分等の軍隊をも宮殿内に入れ、中を荒らし廻らうと云ふ考へかも知れぬです、若し彼等に其様な考へでも持つて居られて、一も通過と云ふ時になつて、例の暴行擧行を恣にするに行らざれた時は、折角是まで苦心に苦心をして、日米兩軍隊で保護して居たのが、書辭になつて了ふて、我々は唯徒らに彼等に暴行をさせるまで、番をして居て遣つた形になつて了ふですから、是は餘程な考へものぢやと思ふです』と演へましたので、山口司令官も福島將軍の意見を聞いて、至極同意を表された、山口曰く、如何さま、君の言はるゝ如く、彼等の事ぢやから、亂暴を行らないとは限らぬ、では一ツ米國の指揮官に其事を語つて、さうして何とか豫め其様な暴行を防ぐの手段を施して置くて、然る後通過を實行するに云ふ事にしたら宜しからう』と言はれぬので、爰に於て、福島將軍は直ちに仕度をして、米國司令官の許に到り、其の意見を語つて後、福島閣下のお考へを拜聴したいです』と言ふに、米國司令官も至極賛成をされた、それは最早、福島閣下の被仰る如く、露佛兵の如きは皇城内に入る時は、何の様な亂暴を行つても知れぬです、畢竟するに今まで日米兩軍隊で、三門を占領しながら唯外から守備して居るばかりで、兩國人さへ二人として中へ入れなかつたのは、不安心であるからです、日米兩國で、斯までに慎重の態度を取つて、皇城を占領し、清國朝廷を充分に軍にして遣るのは、清國人に取

つたら、何の位置はしいか知れぬです、眞に彼等清國人は、上下舉つても有難がつて居るやうでありますのに、今若し一朝通過を名として、宮中を荒して了ふなら、日米兩國人の苦心は忽ち水泡に歸して了ふて、遺憾は此上もない、後世までも、我々日米人の耻辱です、既に楊村でも、我が米國と英國軍隊とは随分骨を折つて、一も楊村占領の時は、露國の爲に先んじられて、馬鹿を見て居る位です、彼等實に狡猾です、不徳極まつて居ますが、決して油断なりません』と言つて、イヤ最早口を極めて露人を罵つたさうで、いす、そこで福島將軍も、米國司令官にして斯の如く、我が司令官の意見に同意をして呉れる以上は、大いに意を強ふ致して、『貴官閣下が、御同意下さいましたのは寔に喜ばしうございます、併し皇城通過の名義口實が立派であつて、且つ一度我々も之に同意した以上は、今更反對は出来ななし又眞に唯通過をして、宮城内を見るのみ、それこそ望む所でありませうから、ミア小官の考へには、英國司令官にも豫め交渉して置いて、時日を遷延せしむるのですなア、さうして決して亂暴の出来ないうやうに豫め準備して而る後實行すれば差支へないです』福島少將は、米國の司令官が我が司令官の意見に賛成して呉れましたので大いに喜び、今度は英國の司令官の許に参りまして、其の趣きを演へますと、是又大いに同意を表しまして、且つ言ふに、『何しろ、皇城の各門は、日米兩國にて占領守備して居るし、且つ日本は其の重なる三門を守つて居らるゝ事であつて見れば、之を聞いて宮中を通過するに云ふ事は、無論日本司令官に其責任があるものですから、餘程貴官等が御注意の上にも御注意をなし、警戒の上にも尙警戒を嚴にして蒐らないと、後大いに悔ゆる様

な事があると思はせぬ、萬事其の心算で、併し貴官が、用心周到なる人だから、そんな失策はありませぬ、と云はれました、福島少將も笑ひつゝ、嘔吐ひして立歸りましたが、それより數日間はその儘になつて居て、別に露國司令官から何とも言つては参りませぬ、想ふに露國司令官も、種々の要用が澤山にあるからそれが爲に其儘にして置いたのでございませぬ、ヌルと數回前に演説を置きました如く、神武門内から食糧に等しい糧を支那兵が、空腹で堪へられないので、飯を恵んで呉れと請求し、それから東華門を開いて、宮中に居る支那兵を出す事になりましたのですが、其事は前に委しく済んでありますゆゑ、御参看を願ひます、此時我が司令部では、種々評議の上、彼の宮中に居る士官等は、再び宮中へ入れ置く事になりましたそれは何故に斯の如くしたるかと言ふと、何れ皇城の通過は實行しなくてはならぬ事になつて居るから、其時は彼等を案内者として通過する必算でござります、且つ皇城の中を取締らせて置いて、火の用心其他の事も萬事注意させなくてはなりませんゆゑ、そこで彼等の中に重立たる者共だけ十數人を呼び出して、川島通譯は彼等に向ひ「爾等、是から宮中に還つて萬事の取締りを致して居れ、勿論食物は此方から入れて造るに由つて、糧食の事は心配に及ばぬ、其の代り火の用心は無論の事、其他の事總て粗悪な事やうにして掃除も成るべく丁寧にして、他日列國軍が皇城中を通過する時は、成るだけ見苦しくないやうにして置かれ」と命じましたので、彼等は領承して、直ちに部下の中から撰抜したる兵卒を若干づゝ従へ、再び宮城内に入つて了ひましたが、其他の兵卒等は皆暇を遣つて思ひ／＼に立去らしたのであります、然るに此時に

方りまして、漸く支那官吏の重立たる者が、追ひ／＼頭を出しかけて参りました、彼等は北京落城して、皇帝と西太后とが蒙塵する、と同時に、皆潜伏して了つて一人として顔を出す者はありませんでしたが、いよく各國の守備區域も略ぼ定まつて了つて、皇城の各門も嚴重に守備し、城内各街の整理も漸くに附きかゝつたし、且つ日本人は何れも紀律の嚴肅なる爲に、暴行を爲す者はなく「少しは分捕位行つた人もあるが、それは憐れみから仕方がない、大眼に見て置かなくてはならぬ」彼等が思つたよりは穩かになり方が早かつたから、そこで彼等も安心して、ポツ／＼頭を出しかけたものと見えます、彼の有名な那桐なども、真先がけで日本司令部へ出掛けて参りました、福島少將に面會を乞ふたり、又は西公使へ面會して辭を揮ひ、頭を低れて、種々頼み入る所は實に構むべき有様でござります、或日の事、各國の指揮官が、露の司令部へ集會しましたが、尤も日本は、例の如く山口司令官が行かなくて福島少將と原田少將だけ参りました、露國司令官リウニエツチ中將は一同に向ひまして「豫て諸君に話をして置きましたる皇城通過の事ですが、小官は是非之を實行したいと思ひます、諸君の思召しは如何でせうか」と言ひ出したので、福島少將は進み出て「皇城通過の事は勿論賛成でありますけれども、今些し先へ延ばして行つた方が宜しからうと思ふです、如何なるに、未だ討伐せんければならぬ義和團匪の殘徒なども、所々にありますから、是等を悉皆平けて後、最早全く靜穩に歸したと云ふ所で、皇城の門を開いて、華やかに之を通過する方が宜しからうと思ひますが」と言ひましたので、米國司令官は、第一に

是に賛成の意を表しました。ムルと英國指揮官も亦之を賛成して言ふに「福島少將の説の如く、是は殘徒を討伐して、全く靜穩に歸して後の方が宜しうござらう、一ツには靜穩に歸した其の祝ひを兼て行りたいです」と言ひました。遂に各國司令官も之に賛成なし、爾云ふ事に決しましたが、併し日本司令部にては前にも預てある如く、山口司令官を始め一同此の皇城通過に就ては「方ならぬ心配をして、清國朝廷の上官を呼んで、中の様子など聞いて、豫め暴行を防ぐの策を講じて居ります、然るに八月二十三日に至りまして、又も各國公使及び司令官は、露國の公使館に集會して、皇城通過の事を議しましたが此時は已に殘徒も討伐し盡して、畧奪かになりましたので、此月二十八日を期して通過しやうと言ひ出したのは、露國司令官リウニエツチ中將であつて、此時誰一人之に反對する者はなく、皆舉つて賛成を表しました、時にリウニエツチ中將は「然らば此の皇城の通過に、各國から出すべき兵數を定めて置きたいと思ひますから、萬國諸君は何程づゝ出しますか預て置きたい」と言ひました。福島少將は「では我が日本は歩兵一個大隊だけを出す事に致しませう」と言ひました、露國司令官も「日本が一個大隊出すならば、吾が露國も突如一個大隊出す事に致しませう」英と米と佛の司令官は、各々一個中隊づゝを出さうと申しました、埃と伊とは一個小隊づゝを出すと極りまして、茲に於て各國より出すべき兵數は、チャンと定まりましたが、サアいよ／＼皇城内を通過する序列を決するに當つて、又もや紛議を生じ來つたのであります、それは如何なる有様であつたかと云ふに、露國司令官が言ふに「爾各國で出すべき兵數の決定しました以上は、通過す

るの順序を定めたいのであります、是に就て萬國各司令官の御意見を充分にお預下さい」と云ふ詞の終るや、我が福島少將は「日本軍隊は天津城攻撃以來、何時も先頭に立つて進んで來ました事は、今更喋々の辭を俟たずして各司令官の知らるゝ所であります、故に矢張此の皇城通過にも、無論我が軍隊が先頭に立つて通過するに至當と存じます」と言ふや否や、露國司令官リウニエツチ中將は、滿面赤を戴きたる如き顔色をして福島將軍に向ひ「福島少將は随分御自分勝手なる説を吐かれるものである」と先づ怒云ひ出したのであります。

リウニエツチ中將は、尙ほ語を次いで言ふに「露國軍隊は、是まで非常に盡力をして、天津にては、日本軍隊の多く着せざる以前より、我が露軍は最も多數の兵員を出し、居留地籠城者を救助したる事は、諸君の認めて居らるゝ所であります、爾來日本軍隊の續々到着するに及んで日本軍先頭たりしと雖も、我が露軍も亦決して日軍に劣らず盡力をして居ります、然るに福島少將は、日本軍先頭たりしの故を以て、皇城の通過も亦日軍を以て先頭たらしめんと言はるゝは、甚だ以て其の意を得ない理由です、何故ならば、日軍に先頭たる事を讓つたのは、云はゞ我々が、一步遠慮して先頭たらしめたのですから、本來ならば、今度こそ日本人が一步譲つて他の國を先頭たらしむるが至當と思ひます、然るを自ら進んで又先頭たらんと言はるゝは、些と御自分勝手かと思はれます」と、想ら皮肉に突込んで參りました、福島少將は莞爾と笑ひ「イヤそれは、リウニエツチ閣下の御詞が、些と當を得ないと思はれます、日本軍隊は、天津城攻撃以來、一方

からめ苦戦を爲し、他國に比すれば、遙かに盡力の仕方が優つて居ると云ふ事は各國人の認めて居らるゝ所であります。殊に皇城の門は四個所にある中を、日本軍隊にて其の三個を占領して、現に今守備して居るのですから、此の皇城通過と云ふ事は、僥倖しても日本軍を以て、先頭と致して戴かなければならぬです」と、斯の如く演説をなさると、米國と英國の司令官は、例の如く日本に賛成を致しました。スエと佛國の司令官は起立して言ふに「露國軍隊は、北京攻撃に方つて、第二番に東便門を破城して、其の國旗を城壁上に掲げた事は、各國人の認むる所であります。然らば即ち露國を先頭として、皇城を通過するが當然です」と言はれましたので、サア又議論は紛々として、容易に決定致しません。露國司令官リウエニツチ中將は「それでは慫慂させよう、日本軍隊と我が露軍隊と、肩を並べ足並を揃えて通過する事にしませう、爾すれば兩國軍隊が先頭と云ふ事になりますから、其方が宜しからうと考へます」と、斯の如く言つたので各國公使は一同にクニクニ笑ひ出しましたが、其中に公使等は一人立ち、二人立ち、遂に公使等は一人残らず立ち去つて了つたさうです。此の議論一時三十分間に涉りましたが、未だ以て何とも決しませんで、最早や誰しも口を開く者なく、唯黙して顔と顔とを見合すのみ、實に奇妙不思議な有様であつたさうです。時に少佐原田輝太郎君が進んで言ふに「此様な事で、貴重な時間を費すは、毫に馬鹿／＼しい事ですから、時になら如何です、日露英米佛の將官だけが、残らず並んで先頭に立ちて行く事とし、其中にて日本の將官が一番先きにて、次が露國、それから英佛米と、斯の如く將官だけ先頭に進んで、其の次に歩兵が行く事

とし、歩兵の先頭には露國の歩兵を立てるとしたら如何です」リウエニツチは少しく怒りたる顔色を露はして「それは不可ません、我輩は尙も軍團長です、日本の司令官は師團長であるから、軍團長が師團長の後に附くと云ふ法はありません」と云ひ切つて、斷乎として此の議を排斥致しましたゆゑ、茲に又議論は中止の姿となつて、坐中再び水を打つたる如く、静まり返つて了ひました。此様な些細な事で、議論が面倒になつたのは馬鹿／＼しいやうだが、意氣張上又止むを得ませんのです。米國の司令官は「此の事は萬望、日本の司令官と露國の司令官とにて決して貰ひたいです、我々は何番目にやらうとも些しも厭はないのですから」と言ひますと、露國司令官は露時考へて居りましたが、稍あつて福島少將に向ひ「貴君の御意見は、先刻から窺つたから、篤と承知しましたが、併し山口司令官の御意見は如何でありますか、一ツ聞いて頂きたいですな」と、徳言はれるので、福島少將も是を拒む事は出来ませぬや、承知しました、では我が司令官たる山口中將の意見を一應聞きましたる上にて、又た何とか折合を附ける事に致しませう」リウエニツチ中將「萬望、爾して下さい、それでいよいよ通過の序列の定まりました以上は、各國參謀官を前へ出して、豫じめ萬事を議決して置くやうに致したいです」少將「毫に御有理なる詞です、では通過の前日の八時までに、參謀官だけが集會して、萬事を打合せを致しませう」と、斯の如く言つて別れましたが、福島少將は、公使館に歸りまして、山口中將に向ひ露國司令官の言ふ所を報告して、其の意見の有る所を尋ねますと、山口中將は例の如く先づ「アツハ、ハ、ハ、ハ」と哄笑し「イヤ今に始めぬ露國

司令官の我儘な言状ぢやね、殊に肩を並べて行くなどは、全然小供の戯れに等しい、其様な馬鹿げた事は出来ぬ……では、露國司令官の言ふ通りに、向ふを先頭に立たして進らう、何も皇城通過に先に立つたからとて、それで我國の名義が揚る云ふでもなく、後から通過したとて、國威を損する理由ではないに依つて、宜しい、露國司令官の言ふ通りに先方を先へ立てやらう』と言はれずから、福島少將は、又た露國司令官の許へ到り、山口中將の言はれたるが如く申しますと、リウニエツチ中將の喜びは「通りでいませぬ」イヤ寔に山口中將の御好意は辱なく存じます、それこそ露國と日本國との親密なる事が明かに分つて、實に喜ばしく存じます、萬望山口中將閣下に宜しく言ふて戴きたう』と非常に嬉しがつたやうです、そこで福島少將は又た公使館に歸りて、山口司令官と種々御評議をなさいました、福島少將の言はれるには「豫じめ皇城内を改めて置きて、悉皆準備をして暴行の出来ないうちにして置きたいと思ふですが如何でせう、それでないと、露軍が先頭では、何様な事を爲すかも知れぬですから』と言ひましたゆゑ、山口中將も「如何なる、是は其方が宜しからう』と言つたので、福島少將は、是から直ちに、我國で言つたら宮内大臣も云ふべき大官の世體を云ふ人、それから今一人は日本へも参りました支那大官中に有名なる那桐と云ふ人に面會して、各國司令官の會議の結果を概略物語り、且つ言ふに「此の如く決定しましたので、いよいよ廿八日を期して宮中を通過するのであるが、其際若しも先頭に立つ露國兵が、暴行を爲すやうな事があつたならばそれこそ宮中は荒れて了つて、我々日本軍隊が折角是まで苦心をして門々を

守備して居た甲斐もなくなるし、第一宮中までも、他國兵に荒らされたとなると、貴國は後世までも恥を感ぜなければならぬですから、萬望其様な事のないやうにしたいです、故に貴官等も其の苦心で、豫め準備をして下さい』と、信切の情を籠めて言ひましたので、彼等の喜びは一通りでふいませぬ、前回は「十演じ落とした事があるから、茲處で演じて置きますが、各國司令官が、皇城通過の事に就て、會議を開いた節、佛國の司令官も、少將が、愚云ふたやうです』サテ諸君、いよいよ廿八日に皇城の四門を開いて通過するのは、寔に喜ばしき事でありますが、若し其際、皇城内に支那兵が潜伏して居て、抵抗を試みたならば、無論是を擊退しなくてはなりませんから、戰爭準備を充分にして、さうして通過した方が宜しからうと存じます、此の事に就ては、日本軍隊が三門を占領守備して居りましたゆゑ、日本の御見込みを窺ひたいものですが如何でせう』と斯く如く言はれまするので、我が福島少將は笑みを含みながら「イヤ其事は決して御心配ありません、尤も占領の當時、皇城内に四五百名の兵員は居ましたが、一度彼等を殺ら出した上、其の頭立ちたる者だけを再び入らしめて、火の用心其他の事を取締らせてあります、それとても厚く説諭を加へて、決して心得違ひのないやうにしてありますから、通過の際に方つて抵抗するやうな事は必ずありません、此の御心配は御無用に願ひたいです』と言ひます、佛國司令官は重ねて「併し萬一抵抗するやうな事がありません』と念を押して言ひますので、福島少將は「決して其様な事はありませぬ、小官の言に間違ひがあつたら、小官の首を差上げます』と斷乎言ひ切つたやうです。

首を造るなど、言ふ事は、「一寸聞きますと何だか小供の戯れらしいので、福島少将ほどの人の言草とは思へませんが、全く此時福島少将は斯の如く言はれたのです、サア徳言ひ切つて見ると、我々如き者が友達に向つて言つたのと違ひ、福島將軍ともあるべき人が、殊に外國の將官に對して言つたのですゆゑ、決して反古にはなりません、されば福島少将は非常に此の事を心配しまして、山口中將とも種々評議の上、清國の大官とも、屢々會合なして、重ね々此の事を告げ、「萬一心得違ひの者のありたる時は、小官も一たび佛國司令官と誓つた事の爲、無論首を渡さなければならぬ、小官の首一ツ位は何でもない事をやが、それが爲に宮城内を荒されて了つては、折角の苦心も水泡と消えるのみならず、實に大清國萬々世の後までの耻辱であつて歴史の大汚點を殘さんければならぬから、萬望其機な事のないやうにした」と言ひますと、世續も那桐も、福島少将が首まで懸けて引受けて呉れた其の厚意心切は實に辱なりと云つて涙を流して喜びました、那桐は少将に向ひまして「如何でせう、御安心の爲に、貴官が一ツ宮中に入つて、改め置かざる事は出来ませうか」と言ふから、福島少将も「實は小官も爾して置きたいと思ふですから、では豫め觀て置かせう」と茲に於て、那桐は自ら案内者となり、東華門から、密かに福島少将を導きました、少将は中に入つて見ると、流石に四百餘州に君臨し玉ふ皇帝陛下の宮殿だけあつて、驚くばかりの構造でいます、少将は鉛筆と洋紙を取つて、自ら見取學圖を認めながら、逐漸に與へ進み入りました、那桐は自ら一々福島少将に説明致しますゆゑ、此處は何と云ふ御殿であるか、彼處は如何なる時に用ゆる御室であるかと云ふ

事まで詳細に知る事を得ましたのです、福島將軍は、那桐と種々評議の上、いよいよ聯合軍隊が皇城を通過するに方つては、始め先づ大清門から入つて、午門を通り、寶和殿の所から、右に廻つて北へ出ると云ふ事に定めました、若し寶和殿の内へ入つて通過する事になると、それこそ皇帝陛下の御座所を通り抜けるのだから、若しも御座所を荒らす様な事があつてはなりませんゆゑ、そこで斯の如く寶和殿の前から右へ廻つて北へ出ると云ふ事に定めました、即ち陛下の御座所へは、一歩も踏込ませまじと云ふ心算から、懸決したのであります、尙ほ福島少将は那桐に向ひ「それで當日は、貴君等清國の大官は、禮服着用にて出迎ひ、案内せられて貰ひたいし、又判官等に命じて、内外を充分に警備せなくてはなりません、其他萬事不都合のなきやうに、與々も注意して行つて貰はなければなりません」と言ひましたので、那桐は「重ね々御厚意、遂に有難く存じます」と言つて大層喜んで、其日は別れましたが、支那官吏はそれから充分に準備に取懸りますし、福島少将は、圖を作つて、廿七日各國の參謀官の會議には、此の圖を持ち出しまして、此處から斯う通つて、是へ出てと、一々指し示して、通過の道筋を告げましたので、各國の參謀官も大いに喜びまして、其の用意の周到綿密なるには、皆感心致しました、それで廿八日には、午前八時までに、各國司令官を始め、軍隊も大清門前に集まつて、そうして順々に進入すると云ふ事に決して、其日は別れましたが、日本からは、一個大隊だけの兵員を出すと云ふ事に決して居りますゆゑ、四十二聯隊の第三大隊長、西山少佐敬君が古參の大隊長であるから、

此の主人に指揮を取らざる事に決しましたが、兵員は各部隊から一個中隊づつを出し、各中隊毎に軍旗を携へしむる事に致しました、原田少佐輝太郎君と、中川大尉幸助君と、此の二人の参謀官が附き添つて、萬事を取計らふ事に致しましたが、借八月廿八日の早天から、各國共に司令官は、兵を率ゐて續々と集合して参りました、日本は山口中將が参謀副官等を従へて行きますと、大清門前には、已に露英米佛の兵集まつて居りますし、又今續て集まり来る最中のもあります、向ふ側には露兵一個大隊整列致しますと、此方側には日本兵一個大隊だけ整列致しました、ヌルと此時露國司令官リウニエツチ中將は、馬上にて参謀副官を従へ、露兵の整列なし居る所をグルリと一廻り致しましたが、露兵は敬禮を爲して、萬歳を三呼致しました、リウニエツチ中將は、英米佛獨の兵の整列して居る所をも、グルリと廻りましたが、其の有様は恰もリウニエツチ中將が、今日の總指揮を取ると言はぬばかりの面色をして居ますから、山口中將は之を見て「之は今に日本の方へも来るぞ、必ず来る」少將彼の様子では參るに相違ありません、今日何も彼に總指揮を委任した譯ではありませんのに、彼様な事を爲るとは、言語同断です、併し英米佛獨ともに、十分敬禮を致しました、米兵は最も敬つて禮をしましたが、今にもおれ此處へ來ましたならば、怎麼云禮をさせませう」山口中將「爾がやなや……生意氣な男ぢやのう」露國司令官リウニエツチ中將は、自分聯合軍の總指揮官にでもなりたる如き氣取りにて、馬上傲然として乗廻り居りますので、皆心惹く思つて居りますが、其中に日本軍隊の整列して居る方へも遣つて來さうであり

ますから、若し來たら之に對するに、如何なる禮を以てせんかと云ふ事に就き、山口司令官は参謀等と種々詳議を致されましたが、山口中將が言ふには「何も彼に對して、其様に過當な敬禮をするの理由がない、唯將官に對するの禮を以てすれば、それで宜しい」と、斯の如く言はれたので、そこで西山少佐に其の旨を告げますと、果して此時、露國司令官リウニエツチ中將は、馬上傲然として、我が日本軍隊の所へ進んで参りました、我が西山指揮官は、喇叭を命じて、二回の喇叭を吹奏せしめました、即ち中將に對するの禮を行はせました、之が終ると、いよいよ通過に蒐るので、勿論各國の公使も遣入りまするが、公使等は決して其様を先を争ふなどと云ふ事は致しません、皆て先づ露國司令官リウニエツチ中將は、眞先に立ち、馬上の儘門内に進み入りますと、露の樂隊は樂を奏しつゝ此の後に續き、露國兵一個大隊足並を揃へて肅々と進入致します、次いで我が司令官山口中將は、馬から下つて、徐かに歩を進ませます、之に續いて福島少將其他の参謀副官も、無論皆歩行して進入致します、其の後から、我兵四個中隊西山少佐の指揮の下に、最も勇ましく、最も嚴肅に、隊伍整々として進入致しますが、日本は未だ此時に軍樂隊が行つて居なかつたから、喇叭を吹奏せしめつゝ進むので、英國及び米佛獨の將校等は皆馬上であつて馬を下つた將校は、全く日本のみで、故に支那官吏等は之を見て、誠に日本人の禮讓に厚きを感じ心したさうで、それを英國は矢張樂隊を率ゐて入りましたが、佛米獨は、皆日本と同じく喇叭であつたさうです、サテ露國司令官リウニエツチ中將は、眞先に立つて寶和殿の前まで進んで参りますと、

大理石の高橋がかゝつて居ますが、其橋は恰ど鎌倉の八幡宮の前にかゝつて居る太鼓橋のやうに、高くして殆んど丸くなつて居る位ですから、逆も馬では越されませぬ、故に此處へ來つて、流石に傲慢なるリウエニエツチ中將も、馬を下り徒歩して、此の大理石橋を越えました、さうして賓和殿の中へ靴を穿いた儘に、些しも遠慮會釈はなぐツカ〜と踏込んで参りますので、後方より之を見たる我が司令官を始め、將校等は心の中に、餘りと言へば無禮極まりたる露人の所爲なりと、怒らぬ者は一人もムいませぬ、リウエニエツチ中將の背後から、露國の將校も兵卒も同じやうに、些しも憚らず、ドシ〜這入つて行きますゆゑ、山口福島の兩將官は、何か亂暴でもしはせぬかと頻りに心配しつゝ、露兵の背後から急いで這入つて参りました、是は若し亂暴な事を爲れば、福島少將はリウエニエツチ中將に忠告する心算であつたさうですが、別に亂暴は致しませぬ、殿の中央に、皇帝陛下の坐し給ふ御座が据ゑありますが、イヤイヤ座埃堆かく積つて居る位であつて、眼も當てられぬ光景、實に御痛はしき事でもういいます。

(二百十五)

流石に露國人と雖も、皇帝陛下の玉座の上へは昇りませぬで、其の横を通つて参ります、其の次ぎの大和殿之も開いてあるので、矢張其の真中を通行して行きます、そこで我が日本ばかり遠慮しては、却て宜しくないから、矢張同じやうにドシ〜踏込んで通行しますが、支那官吏等皆厭な顔をして見て居るもあれば、

中には口惜し涙に暮れて居る者、又は齒噛みをして居る人もあつたさうでういいます、此の大和殿を通過するど、今度は乾清宮でういすが、之は門が開けてありまして、通入る事が出来ませんので、據なく露國司令官リウエニエツチ中將も、右の方へ廻りまして、右の門から北へ出で、裏庭に出でました、裏庭は總て樹木森々、石が積んであつて、之に珍らしく美しき草や花が植えてあつたさうでういいます、其の作り方は至つて雅緻があつて、外國人の眼を頗る喜ばせましたが、此の裏庭へ出でると、最う裏門なる神武門でういいますから、露國兵は門内に整列しました、日本司令官は眞先に立つて、參謀副官日本兵之に續き、露兵の前を通過すると、露兵は皆禮を致します、我兵も答禮して、露兵の北に双んで居りますと、今度は英兵米兵獨佛兵ど、順次に皆禮を爲しつゝ通過して、遂次に北へ整列しましたから、是で先づ皇城の通過も無事に終つて支那官吏も大いに安心したやうでういいます、そこで支那官吏は、我が司令官の前に來り「是から乾清宮を開いて御覽に入れなく、又た粗茶を献じたたく存じますから、萬望兵隊を御解散すつて、將校方だけ御出でを願ひたく存じます」と、言ひますゆゑ「宜しい承知したと言つて、直ちに兵隊を遣し、司令官始め、各國の將校等、支那大官の案内に従つて、宮殿中奥深き所まで入つて見ましたが、流石に清帝の宮中、勿々立派な者ださうでういいます、支那官吏等は茶菓を出し頗る意を用ゐて饗應致しましたが、彼等は福島少將を別席に招きまして、殆んど頭を下に着けんばかりに垂れて言ふに「寔に貴官の御厚情、何ともイヤ御禮の申上げやうもムいませぬ、我々は今日皇城通過の際は、諸外國兵の爲に、如何なる事をされるものにと、皆安き

心なく、唯そのみを愛ひて居りましたるに、貴官等日本人の事情は深き計らいに依り、無事に通過を済ます事を得ました、是全く以て貴官等日本人の陰謀と、深く肝銘なす所であらう、我が皇上及び太后陛下の御前に達しましたならば、何様にかお喜び遊ばす方がなまぬいませう、實に吾々は、貴官の恩徳を長く忘るは仕りませぬ」と言つて、眞實彼等は日本人を徳として深く其の厚情に感たうせうと云います、サア之で皇城の通過は終へまして云いますが、是から演じましたならば、獨逸公使殺害者の捕縛やら、北京城内戦後の惨状やら、又は皇帝の還幸其他種々の話には澤山ありますが、已に本編も第六編二百十五回の長きに涉りましたから、茲に穿出度く結局として置きます、長々御愛讀を賜つて有難うございました。

日本の旗風終

明治三十七年八月廿五日發

行 刷

日本之旗風第六編
賣價金三十錢
郵税 金六錢

著 作 者

東京市淺草區西三筋町六十五番地
天 野 節

發 行 兼 印 刷 者

東京市神田區皆川町二番地
田 村 茂 太 郎

印 刷 所

東京市京橋區日吉町四番地
民 友 社

發 行 所

東京市神田區皆川町二番地
田 村 書 店



關東大販賣元
關西大販賣元

東京市神田區雜子町
特電話本局一四八
大阪市備後町

合資會社 岡崎屋書店
吉 岡 平 助

